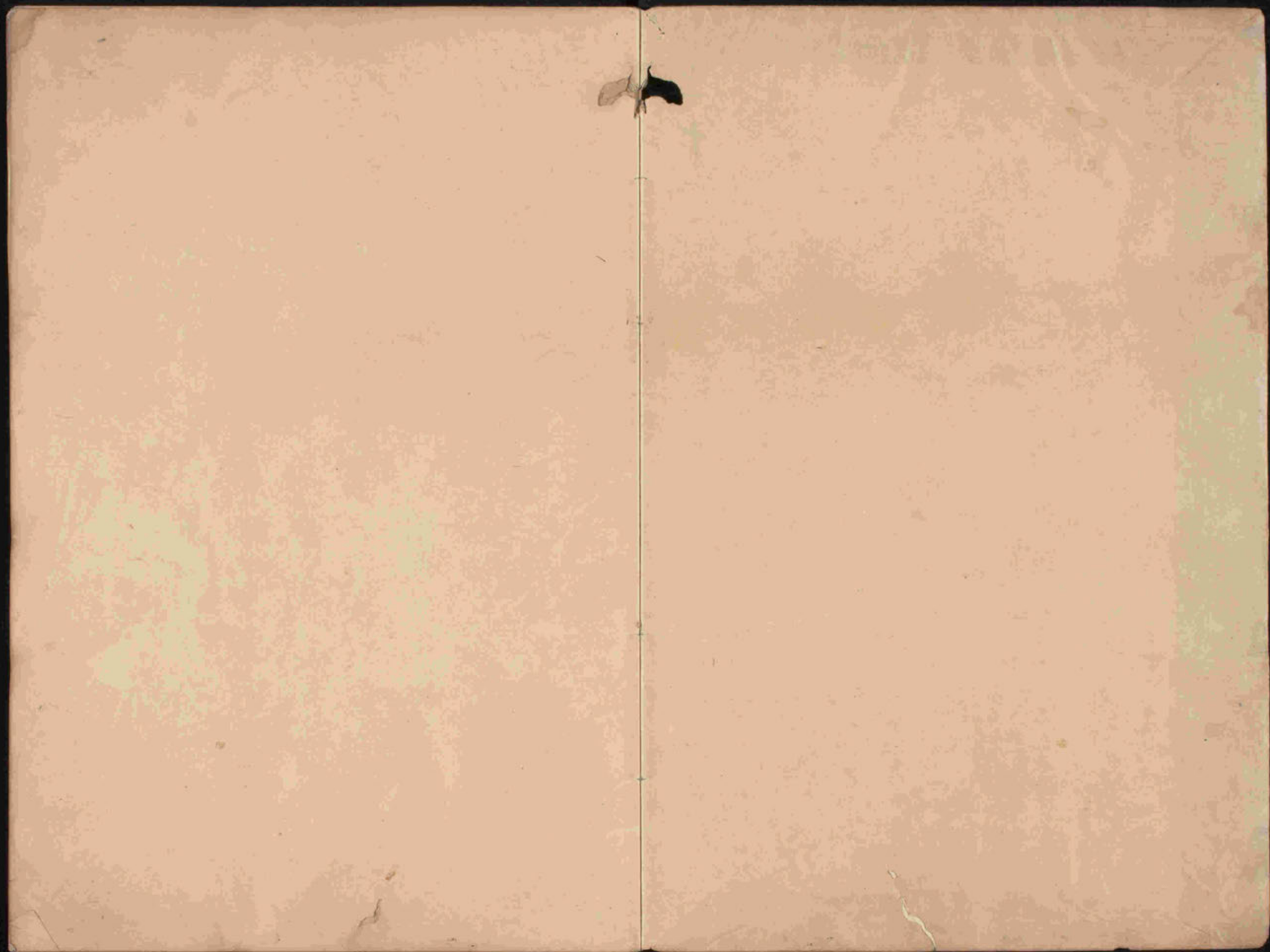


續後撰和歌集





1844

Received of the Honble East India Company

the sum of One thousand five hundred and thirty

and no parts of Rupees

for the purchase of the following

Articles of Goods to wit

One hundred and fifty

bags of Indigo

at the rate

of Five Rupees

續後撰和歌集卷第一

春哥上

年^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

皇太后宮人末後成

年乃^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

承暦二年の裏後未嘗^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

前中納言建房

か^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

天曆卯付廉景殿の女^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

女侍忠見

わ^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

後法性寺入道前用白右大臣^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

百^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

一^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

久^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

鎌倉右大臣

初^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

正治二年後鳥羽院^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

後京極持政前左大臣

年^{このころ}の春^{はら}をよみわけける

道助は祝の家の又十の言よと付けるよ初考は
也
参議雅行

久の乃天の老戸のじうよりわくれいとし考は
後鳥羽院の御歌

ちうこのじゆれをい藤はまの言けいはわさゆし
百の言よりみはけの中よ

入道前抄取た人本

考は信言もれしこわ一家のよれいより藤也じ
位よおゆしけりけり人のをのこもをを十のりて
言にのりまじつとけりかえよ藤を

太上天皇

お場がよまじし一師の細氣りつじ一月と考は
人よ十の言のりけり

林代よ力かじりし考もれする一と氣つて我ら天の
前を改人本

ふれいし我らとみしわさりしをさるる考の氣けり
道助は親と家の又十の言の中よ初考

西園寺入道前抄取人本

まうしりる氣もれけりし我らとみしわさりしをさるる考の氣けり
寛平ははきまじりしをさるる考の中よ

よみ人しよ

ふらゝ考立くしよしよのり野の庵をよむるあり

兼景殿の女侍の屏風よ

紀貫之

わきよしつと考立くしよしよのり野の庵をよむるあり

よみ人しよ

よみ人しよ

冬く我く考立くしよしよのり野の庵をよむるあり

うらみ寸の羽衣をよむる考立くしよのり野の庵をよむるあり

百三三のりよとぬける中よ書立

ちん門はれ書

雪乃しらゝ考立く有るにけりしよのり野の庵をよむるあり

建保四年百三三のりよとぬける中よ書立

入道前持殿夫人

うらみ寸の羽衣をよむる考立くしよのり野の庵をよむるあり

早考立くしよのり野の庵をよむるあり

さか娘乃衣考立くしよのり野の庵をよむるあり

考乃書立中よ

子留いのりよの考立くしよのり野の庵をよむるあり

延喜十四年女御の屏風よ

貫之

ふみれい雪うゆこゆる春霞いにこころしめしきりては
天徳四年に裏百の合ま

平兼盛

白妙の雪ゆるやしの梅しよけり雪う春しにゆる

歌しゆりす 伊勢

梅の花しゆに白く春ちちゆるゆる雪にゆるゆり

録念右大夫

梅のむまうれうわすし凡まうれし雪うゆり

建仁元年又十の言しゆりける所

最中納言定家

梅の花ちりふ里の春のあき

建保四年に裏百番三の合ま

順徳院抄製

ゆり雪よいにれをたごつこ子りゆり春の梅し

赤磯雅行

ゆり雪よいにれをたごつこ子りゆり春の梅し

残雪のしを ちか門院抄製

埋木乃春のまゆるの春し初日しれの春の雪

堀河院御所百の言しゆりける所

藤原基俊

考乃日のうらみくに照す垣ひよこしとぬに雪う清くよす
久世六年まふ此世は百三の言ことばりける時ときあり成
よみふけり
皇太后宮人丈後成

あゆり雪し清也やみののみのこころ原よつるに
月しんを
土ら門流し書

白妙の神はゆりしてゆる雪のきくわせ京よつるを
建保四年百三の言の中
入道前持政左大臣

庭く萩乃焼京をゆりて後と久考のつらふし
廉景殿の女卿の言ことばよ

平兼盛

みしとこいふの高根よ言はてつるにむく野はあはり
大原野の社よゆりてふけりよ氣をみくよみ
はけり
皇太后宮人丈後成

考りひとまよけりふとふと小松の京れし寸みりつ
考ことばの中
は姓も入道前用白左大臣

は乃國のふりしむ稿のわしむれがけ代氣しとまらふと氣
天唐のあはれ屏凡よゆりの浦よ氣まきころ所を
よみふけり
入道言也克

寸由のわま乃塩やく燈考くれいしに氣の名まやま

青柳の糸緑よりけりけり春風のささけ思ふささけ人とりふ

後原基俊

春風に吹るささけささけささけささけささけささけささけ

道助は親王家の又十三年の尾柳

西園寺入道家をぬか

まは乃ま回のきりの柳のさかたれささけ思ひのささけ草

天曆片時梅の管のさしけりささけささけささけささけ

けり

中務

うらひ寸乃しれれら宿の柳のささけささけささけささけ

ささけささけ

中納言兼補

宿ちりにけりけり柳の花凡のささけささけささけささけ

紅梅をわく紅中納言兼補ささけささけ

参議玄上

春のささけささけ宿の柳の花凡のささけささけささけ

春のささけ

中納言兼補

梅乃花おとしけり柳の花凡のささけささけささけささけ

如新法師

春乃花ささけささけささけささけささけささけささけ

后二位家隆

百歳乃たま人のささけささけささけささけささけささけ

建長元年二月（建長元年二月）前（前）為政（為政）夫家（夫家）又行幸（又行幸）...

りし裏（りし裏）みなり（みなり）けり（けり）し梅（し梅）花（花）さ（さ）り（り）よ（よ）さ（さ）けり（けり）

より（より）き（き）こ（こ）め（め）く（く）人（人）く（く）じ（じ）す（す）ん（ん）けり（けり）を（を）行（行）

けり（けり） 天上（天上）天皇（天皇） （後漢）

後（後）より（より）か（か）う（う）て（て）白（白）梅（梅）の花（の花）を（を）ま（ま）な（な）る（る）や（や）こ（こ）の（の）ま（ま）る（る）一（一）

巖（巖）花（花）全（全）の（の）梅（梅）は（は）り（り）ち（ち）り（り）と（と）み（み）く（く）よ（よ）み（み）けり（けり）

前（前）を（を）政（政）人（人）夫（夫） （善長）
（実氏）

く（く）く（く）よ（よ）め（め）り（り）こ（こ）く（く）を（を）庭（庭）の（の）梅（梅）の（の）む（む）せ（せ）世（世）の（の）

考（考）を（を）白（白）く（く）し（し）世（世）く（く）

續後撰和歌集卷第二

春歌中

ゆ厚を

常贈を政人夫

り（り）り（り）金（金）の（の）輝（輝）多（多）く（く）し（し）と（と）い（い）は（は）し（し）り（り）う（う）く（く）ま（ま）さ（さ）へ（へ）何（何）の（の）世（世）く（く）

恒徳（恒徳）の（の）家（家）は（は）三（三）の（の）合（合）よ（よ）り（り）ん（ん）を（を）

藤原惟成

い（い）け（け）く（く）を（を）一（一）年（年）ち（ち）り（り）里（里）に（に）移（移）し（し）く（く）ら（ら）考（考）し（し）と（と）い（い）は（は）し（し）り（り）う（う）く（く）ま（ま）さ（さ）へ（へ）何（何）の（の）世（世）く（く）

百背（百背）の（の）ち（ち）り（り）一（一）年（年）歸（歸）雁（雁）

入道（入道）二（二）不（不）親（親）日（日）道（道）助（助）

明（明）つ（つ）く（く）ら（ら）こ（こ）の（の）す（す）め（め）は（は）よ（よ）こ（こ）し（し）よ（よ）り（り）う（う）く（く）ま（ま）さ（さ）へ（へ）何（何）の（の）世（世）く（く）

前右取大夫

中つこむらじり居つこきつこむらじりつこきつ居つこきつ考の別紙
前大納言基良

一の丸の露れ衣きぬくよまじりの我てやうくかつこり

春三つの中よ
前取大夫 家

に我あつ方つこきつこむらじりつこきつ居つこきつ考の別紙

右道中将雅志

何ゆへに露れ居のくろくしよのあつちも考の別紙

考面を
前取大夫 家

いふつこきつ世よち考面れ我思申つ先は神は我

野考面こむらじりを
指中納言長方

りよへんこきつつこきつ居つこきつ考面のあつこきつ居つこきつ考の別紙

歌一あつ
前取大夫 家

つこきつわつこきつ居つこきつ居つこきつ考面つ

後鳥羽院御覧

考つこきつ考の考面つちり里のよ野の花も今つこきつ

明徳拾政家百首序り花

前大納言考家

明つこきつ外山の極更の理も我つこきつ居つこきつ考の別紙

後京極拾政前右取大夫

十^三三^三合^々よ^し花 冬^上天^皇

みくもな成がうゆつと若垣のよ一野のよれむのこりハ

花さうりよ^よ西園^もに後^休けり^よ人^く留^りて^こて

三^つよ^み休^けり^よ 元^今政^大氏

あ^らほ^れる^あ世^乃志^る一^こし^里よ^んの^しけ^とむ^をみ^らふ^ハ

久^在百^首尋^りま^りけ^り西^む三^つ

徳^賢門^院堀^河

花^さう^も又^す也^い考^の久^ふ一^つ梯^をつ^ても^れる^白雪

上^西門^院兵^衛

為^行ら^る途^より^る白^雪の^しれ^れ也^よ志^る一^つむ^りり^ハ

建保四年の裏^{百番}の合^々

二^條院^讚岐

い^しの^考一^はか^つら^らし^し井^の花^よの^つを^我志^す

歌^一一^つ 元^久納^言公^任

西^川人^よし^をり^し宿^の花^がふ^らう^こり^や氣

和^泉或^部

都^一乃^とん^をけ^くを^乃け^く考^いわ^さる^名を^立ね^つこ

そ^れを^つく^ま成^梯の^りも^てあ^てふ^との^な一^ゆ一^ハ

壬^七忠^奉

中^心の^夜の^いし^らい^しり^をん^うむ^はは^にい^しん^ハ

人丸

昔新ゆらゆらふふふにけりとのたひとのさくさくありきと
菅野冬ぬ人夫

けり梅うめしよふにけり一枝い為のさくさく花もう有る

車子座くるまのふふ 夏原興凡

みくゆらふわらひのさくさくむさけけりわらふさくさくさくは

元河は初恒

うらうらふわらふわらふわらふわらふわらふわらふわらふわらふ

正治百もものさくさくけり

皇太后宮人丈後成

なまなまのさくさくの乃むわらふさく梅をゆらうゆら

和言所わごのさくさく釋阿よ九十賀とゆらとける時厚凡

よ 元大納言忠良

よろよろの梅うめのさくさくわらふわらふわらふわらふわらふ

百首もものさくさく時見花ときみはなのさくさく

元大納言

今と又花をさくさくわらふわらふわらふわらふわらふ

花

かうさくさくわらふわらふわらふわらふわらふわらふ

寶治元年三月前をぬ人夫西園寺の家よ

幸あつしくむゆ後きしけける日留りてよき休
けり
後土所門心大夫

思ひこや老木の梯世をへくこつそい考りありの物と乞
花哥中、
正三位左家

妻をへく花をみ我にりり中をくこあくこめ中より中花紅
藤原賢宗納未

ちし又おまひや出し方のこをみくこつとく花梯か
後三位右

力乃こことつと我より梯ありてく寸考れん
春日祐あり名所ナク言くよすめてし

を依ける両親を 持僧正円経

へよりふるの都に年ありてく思し流のむと中人
故つ花こいふ事を 如教法師

す心人もわ我いくくのをよわ我まくとくぬむれ多小
甲中を 院部成茂

依中也志賀のここのわを我にり思むのこり也り
前人納言経房家のの合よ

前中納言賢実

ふ中のようは幸中のわにりて花の名こことり中の
建保元年四月庚申に春更こつらんを

後久我をぬ人未

夫乃原のときもあつこく春風よ月共うつと花のうすす
又すもきりけりつづくよ

後鳥羽院所製

わさささ乃原のあまちは源氏枕あひはくもろる月共月

春三の中よ

藤左衛門未

うさささえまよりみち同よりすすとのとる有明の月

細花のつらさを

入道藤左衛門未

この秋あつ細けの凡らんわさむのあつさをよめる

各所花のつらさを

後京隆祐朝未

より野ふにけりよみちのまはりにけりいふる春の白も

入道藤左衛門未

正三位成實

榻花のけりよのゆきよりわささるもよ白く春風

母春見花のつらさを

徳大寺大良

わささのときもよんをけりすもさうとてわささるをけり

真子院言合よ

女直卿製

春風乃るあつ世よわささるとんのかつむく

花の春友のつらさを

後京基後

たの光もいづや梅の花さくらさうふ凡わらふちりも花^{いそ}は

後京極持政大炊殿よとくすもゆけるをが

こよりにつとわらぬ梅の春つて梅はにけく申つて

しけり

式子に祝ふ

あつた乃春をわとれ也八を梅にれアみ一也よかしくさるそ

ぬー

後京極持政前々後大末

八を梅ありしうくのなりをみ一也れ考ふいそわの師

建曆二年大ゆ乃花あらしきしく師幸^{あつ}えて

よとくとわらうなる

後多明徳御書

九を乃むい花又よちわらふりるれ一考いきのふこ思ふ

久世百三三うそて西にアけりぬ

皇太后宮大夫後成

つらなるちして梅の乃こつたる

春のちらうよあふふ^{あふ}とん

歌——寸 西園寺入道前をぬく

かつらぎもゆるりしき風ようらりとも思くぬれ松
道助は親王家の又十三年の春を花を

前中納言宮家

花よこころ我思をれ母の又もわらりけりむらりけり
庭落もこころを 友原教のうらみ

花言の中よ 友原信實朝臣

吹風をいりしをむらりけりむらりけり
後三位行徳

後よむらりしをむらりけりむらりけり
建保四年百三十七年

西園寺入道前をぬく

かつらぎもゆるりしき風ようらりとも思くぬれ松
道助は親王家の又十三年の春を花を

歌——寸 右大臣

咲ぬれりりちり花をむらりけりむらりけり
按察使良教

いろりちり春吹風をむらりけりむらりけり
教をむらりけりむらりけり

旅人酒言為家

わさるるし候りしあそいし人共考す入りしはさるる

洞院抄取家のおつらうよ花

旅人酒言為家

おつらうよわさるるあそいし人共考す入りしはさるる

名所言けりしは 旅中細言言家

こよひ野もよひりしあそいし人共考す入りしはさるる

建保二年の裏言を合らけりしは 何よ花

おつらうよわさるるあそいし人共考す入りしはさるる

花言中よ 旅人酒言為家

さるる花言中よわさるるあそいし人共考す入りしはさるる

正治百言言けりしは

式子日記

今つらうよわさるるあそいし人共考す入りしはさるる

花言中よ 旅人酒言為家

けりしあそいし人共考す入りしはさるる

旅人酒言為家

水とて極ちつらうよわさるるあそいし人共考す入りしはさるる

落花不語之辞樹こつらうよわさるる

旅人酒言為家

堀河池ノ首首言そまをける

春後

紫乃いしよりしる夏あつのむこの春るにかこういよけり

友をくわら

祝詠成茂

立入つてはみくゆいむるこ乃尾とのねよりる夏浪

池邊友といつらんを 鎌倉右大夫

いしやと言ぬる春のわ、宿の池は夏浪うけろい思また

歌しし子

後京極持政前左大臣

春をへくまのわむさく夏あつ乃花共まゝのかうし入り

暮春のしを

悔あやしうむご月つきよ列ならよけらうしのもれ有明のよ

夏京光後朝夫

みくとり春のわのちけれやうしの月は有明をえ

前入納言伊平

今りしものいひけを教むのこもさうめり春の好し

二月盡ついでのしを

土師門地守兼

より野川のし思春とくふりちむれ志りしけしをばけ

春の言ことばのししを

前入僧正慈鎮

我物しうけるる人のかしし春あつのよのあよりち

家二百三十一ヶ所ありけり。郭を

後法性寺入道前用白を改す

引ひて思ひしやうをわしとて思ひ我まよおつて我り

宇治に後法性寺都る人のせしむつりけり

宇治前用白を改す

里を我思ひしやうをわしとて思ひ我まよおつて我り

此 祐子に親王家紀伊

みよとて思ひしやうをわしとて思ひ我まよおつて我り

二月廿道令法師よちよとけりよにりけり

赤染東門

ふちの鳴ししを所鳥園よまきとて思ひしやうを

鳥陽成言合よ初所鳥こりよと

後原正家納衣

きつにせしむつりけり。郭を

夏亭中よ 平政村納衣

一夢よわくはるしひのやうとて思ひ我まよおつて我り

法下賞寛

ちりよまよとて思ひしやうをわしとて思ひ我まよおつて我り

大納言通方

うらたのこしちちのせしむつりけりよにりけり

参議雅行

皇之御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

早苗を

右御門院止書

十の御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

順徳院止書

奉乃松入日すの御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

右兵衛督止書

今又二月きぬの御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

百の御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

右御門院止書

よの御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

右御門院止書

今日くつぬ御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

十首の御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

太上天皇

皇の御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

右御門院止書

今又二月きぬの御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

百の御心

右御門院止書

今日くつぬの御心御申お枯の夕日影うにいとわすのまゝの御心

持人納言忠信

つとくしうしうきりてりし鳥のさく里の五月るれは

後二位家隆

幾とこの鳴るるしうしうに親^{おや}親^{おや}をいふの五月るのう

夏三月廿一日

前大納言隆房

五月るいれし澤をのゝ名のしうしうにちりし我休る

左大臣兼重家

さみそ社の日敷はるに我があすのけさるうしうにけりけり

前大納言為家

天けしやうしうにちりしけりし野のみり五月るのは

源師光

源師光

みらるとすゑとすゑにちりし河川にけりし五月るのは

建保四年百二のち

源正行意

ほしわのちりしけりしけりしけりしけりし五月るのち

又月るを

覚盛法師

さうとれにけりしおほのまをけりしけりしけりしけりし

皇太后宮人史後成

下草に葉まじりしけりしけりしけりしけりしけりし

建保二年の裏百番より

赤儀雅行

と川塩乃りしかの鳩にまとりらわすしみては月あはれ

順徳院抄製

又月あの中は晴るれば結しては月あはれは月のよきす

寛平抄はきこいのまは言を乃り

讀人しす

又乃くは水あはれと天けあはるる月の影しうたね

歌しあす

修理人史郎季

くらししみる夜もあはれをうたわはれは月のあはれ

赤
土御門右人長

又のくはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

長原権持の長原長

かうしはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

正三位の家

あはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

鴨河と

長原教雅の長

つうしはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

又のあの中

惟明親王

又のあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

なるまに〜月日〜

山田法師

美の葉〜凡〜我〜書〜

九月十三日〜

并口休

そ〜春〜草〜笑〜の〜人〜思〜

名所なごころ〜書〜

娘〜こ〜吹〜

建曆二年〜

あ〜

建保三年〜

後二位家隆

ま〜の〜道〜

森連法師

今〜乃〜娘〜

よみ人〜

妹凡の〜

山邊赤人

〜

山邊良

母のりけり

小式部日記

七夕乃わいこつろく歌をもえゆけさう思ひつとわ

也

小井

銀河のよせもあはる七夕よようつちの奥マシ

歌

源重光

ゆれこのつり糸はよみ娘の衣しよとく成河

九月十三日十言合ふし家秋凡

女抄日記

垣が打るしのし業うらあひそ人せしき娘はうい

又治六年女御入内屏凡

后徳人ち九人

位吉乃松のうれよりむくくくくくくくくくく

建保二年の裏娘すまの合ふ娘凡

赤磯雅經

今より乃葉下葉といふことまじぬその娘はうい

秋原

信二佐家隆

そしちまの袖もろよの玉かじくくくくくくくく

歌

中務マ具平親王

ふしこの娘をあらして娘はまきわりの袖のにむ

基後

我乃集よむわさく教子納房をさかひしけしこみきのりてか

順徳院御製

卓乃集にまじるわさくわら白家の神の外なる夕く我うた

建保四年の裏百未田の合よ

元中納言実家

ち成やのそのわさくわら白家の神の外なる夕く我うた

いしあす

西行法師

ゆまをいしあすわら白家の神の外なる夕く我うた

雅成親王

十とわし思ひこりてとこつとるに又る免しけしけのゆい言

漢壁門地女お

ちつしりらあるわさくわら白家の神の外なる夕く我うた

源家清

捨せそわ我わら白家の神の外なる夕く我うた

入道前持取家の娘の三子とていけけの娘と

いりりけ

信大納言實雄

けつ子にいしあすわら白家の神の外なる夕く我うた

いしあ

信長正範言

むすこいしあすわら白家の神の外なる夕く我うた

宗延法師

とのる乃久田野の落しらるひさききり妻より小娘いよき

二条人皇^大人后文大貳

ちくちくしりしをけこもむ所草花枝はゆらゆら

鳥羽院は前裁合よ

大徳の行宗

むすこはゆきつらきつらき娘の野にのびる

歌しおす

伊勢

娘の野の花の名こそよ小郎花のちのこころんよ

弁乳母やこの花よゆり我つけり

陽明門院

あふりしおとをく我女郎むさりの花とみこ人のこめ

妹尋の中よ

式子門親王

白衣乃久くちあけけ我之藤下紫う娘をえける

鳥羽殿八月十又更の言合よ野草花

前々敏大長

そくちとわの我けけ春日野よのころち枝は娘の

九月十三又十言合よ朝草花

太上天皇

つと我すく柄きよあすの後書^{こみかき}の袖よりいつく娘花

土御門院小宰相

なるりしむきくや人の朝をくしむるをの娘とてこのむ
歌しし寸 権大納言忠信

ゆづの藤下葉も多じと忠信のこもる娘のうら
源家長納ま

みづよきし鳴けりすそのなるかあしの小庭もや
久妻百つとすよ 友京實情納ま

妻あふるちりしやむりを廉の志し心算よせける白
名取言けりける所 前中納言定家

うらむしや人の忠信の草のうらむしけりし人の
建保二年娘言けりける所

後二位家隆

しむるなりしけり衣衣の野原の娘乃とまうしけり
娘言中一 家

鶴のく小野の秋のうらむしけりし人の
藤原隆祐納ま

なるりし娘の野原のけり衣衣のうらむしけり
堀河地百とすけりける所 廉

基俊

朝居よりけりし人のけり衣衣のうらむしけり
廉言し 鎌倉大納ま

初めく家よゆきあやの娘のむかひとてさくさく麻う鳴けり

藤原信実納め

ち研のあひれ凡てさびしすそのふに麻う鳴けり

後朱雀院いまこみこの文に申ける時同麻をたてい

つらさをくよみかたけり

持人納言長家

妻あふる麻う鳴けりあふる孝の娘凡てさびく鳴けり

よ又百番言ふるよ 後鳥羽院片製

日教さすを人の松の娘凡て夕く我けて麻うあやけり

建保四年に裏百番言ふるよ

後二位家隆

足引のよのいにくもさ思我て妻あひすし麻う鳴けり

入道前持の宗秋三千三の中よ

前用白丸大光

娘凡て妻あひすし思我のよは屋上のさきしめ

暁麻とひまきを城のこもにうらむにけり

太上天皇

娘のいれをうらむ思入りしあふる孝の持麻のあ

百言言ふは麻 中納言賢季

初めく家よゆきあやの娘のむかひとてさくさく麻う鳴けり

續後撰和歌集卷第六

娘尋中

是貞親王家の言合の言

女侍忠奉

天の京みやこ下くだり子このかけれりや娘くふ居ゐの心こころを鳴なる

歌うた一ひと寸すん

中納言家持

娘むすめ身みも妻つま居ゐりいぢろ居ゐる娘むすめの心こころを鳴なるを聞きく

前まへの人ひと家いへ

天あまにいらはす書かきのとこを娘むすめ見みようらいれらす福ふく居ゐのを

前まへをぬく人ひと家いへようらいれらすを換かへしける時とき

右みぎ進しん人ひと将まさら相

ようらいらはすあまを後にいらはすを娘むすめ見みようらいれらす

歌うた一ひと寸すん

聖せい武ぶ天あま身み所ところ製つくり

けしの綱けの心こころを鳴るを聞きくの心こころを鳴るを聞きく

堀ほり河が流ながれの心こころを鳴るを聞きくの心こころを鳴るを聞きく

権ごん人ひと納のう言ごん師し頼たの

ようらいらはすあまを後にいらはすを娘むすめ見みようらいれらす

西にし園の古ふる入い道みち前まへをぬく人ひと家いへようらいれらす

娘むすめ尋たづね

后ご二に位ゐ家いへ隆たか

朝あさ日ひようらいらはすあまを後にいらはすを娘むすめ見みようらいれらす

く

後鳥羽院御製

わさ日びくさすり（さすり）燈（とう）河（が）第（だい）のきし用（もち）玉（たま）ゆら（ゆら）ら（ら）お（お）本（ほん）

後久我女大長

ま（ま）こ（こ）め（め）く（く）さ（さ）す（す）り（り）と（と）ま（ま）さ（さ）ね（ね）お（お）本（ほん）の（の）と（と）よ（よ）わ（わ）か（か）ら（ら）ま（ま）の（の）え（え）

後京極持政前女大長

す（す）ま（ま）乃（の）浦（の）お（お）の（の）や（や）し（し）〜（〜）わ（わ）夕（ゆ）第（だい）よ（よ）〜（〜）照（てい）守（しゅ）あ（あ）ま（ま）の（の）い（い）は（は）く

建保二年秋十首（た）り（り）け（け）る（る）次（じ）よ（よ）

後鳥羽院御製

あ（あ）ま（ま）場（の）や（や）ま（ま）の（の）娘（むすめ）凡（たゞ）よ（よ）も（も）る（る）こ（こ）ま（ま）を（を）ま（ま）ら（ら）月（つき）の（の）け

百（も）と（と）三（さん）首（しゅ）を（を）ま（ま）ら（ら）し（し）〜（〜）何（なん）と（と）月（つき）

前女大長

天（あ）じ（じ）ら（ら）も（も）き（き）〜（〜）い（い）の（の）娘（むすめ）凡（たゞ）よ（よ）の（の）と（と）お（お）ら（ら）る（る）月（つき）を（を）ま（ま）ら（ら）し（し）

月（つき）の（の）い（い）は（は）く
如（ごと）く（く）法師（はうし）

い（い）は（は）く（く）〜（〜）ま（ま）の（の）娘（むすめ）凡（たゞ）よ（よ）さ（さ）〜（〜）い（い）は（は）く（く）月（つき）を（を）ま（ま）ら（ら）し（し）

あ（あ）ら（ら）は（は）法師（はうし）

わ（わ）ま（ま）の（の）京（きやう）お（お）ら（ら）る（る）〜（〜）い（い）は（は）く（く）と（と）い（い）は（は）く（く）〜（〜）ら（ら）の（の）娘（むすめ）の（の）あ（あ）ま（ま）

長（ちやう）康（きやう）二（に）年（ねん）の（の）裏（うら）〜（〜）く（く）月（つき）不（ふ）如（ごと）く（く）娘（むすめ）の（の）い（い）は（は）く（く）を（を）ま（ま）ら（ら）し（し）

よ（よ）み（み）い（い）は（は）く（く）〜（〜）徳（とく）大（だい）も（も）ち（ち）女（にょ）大（だい）長（ちやう）

よ（よ）〜（〜）い（い）は（は）く（く）〜（〜）あ（あ）ま（ま）の（の）月（つき）を（を）我（われ）の（の）娘（むすめ）の（の）い（い）は（は）く（く）〜（〜）照（てい）守（しゅ）あ（あ）ま（ま）の（の）い（い）は（は）く

月（つき）の（の）い（い）は（は）く（く）〜（〜）よ（よ）み（み）い（い）は（は）く（く）中（ちゆう）よ（よ）

後鳥羽院下野

とにきこり概りしこもわらわにたてこよひの月如名社にた

賀屋重保言合よよみかくりけり

最人納言経房

ししよちかきしきそは月如社に社のこりやこよひあそ

二條用白左衛門家の月十又又の合よ

周防内侍

かくりちかきけこ乳らりし一の娘あまもあそこり思

たし院よりあそけり母

戒考法師

おまこよひの月を思ひ出さくこりけりかよ入るるに

昌春四年八月十又又の合よ哥

よみ人しす

月乳の初あここのとみゆれりいしと又さじは成留さるし

歌しん

後鳥羽院下野

妹乃田のちよをりちと吹凡よ月せてみる家のしんま

何上月こいつらんを 控中納言長方

駒こしんたのくほ河のうし馬月之影をうししんか

駒定の心

大庭つ雅具

遠坂の用をみら乳みれいしよひう娘のしん月まを駒

建保四年百三十一

左中納言左大臣

娘の月河をすすみく^{つら}初寸およまきうく人の海をうらみ

建仁元年八月十二夜和言所撰言合は河月似

こしつかしを

赤陽門地越前

月乳かこみくくより野河見寸浪は娘はうち

正治百三十一

後京極持政前左大臣

かきこやうてら沖を申讀く月乳は娘はうち

九月十二夜十三言合は昔のちりの橋の橋板

ついでく^まころ又巻くく障ちりれは一両名

月

右上天皇

月とち成るくは橋板一板有くはあまはす

左衛門督通成

娘のく平右の用ちすみくく月乳はうのく

女持の依

くくは若年の里ちらうくは我とじくの月

くくく

左大臣 家雲

すじ月をくくはち魚ちうくはち都の娘はあ

すく言合は海邊月くは心をよみ

右上天皇

と下る海乃浦はくつと後より月女と云のあまのよしの

後京為教納ま

御守鏡子也之のうしろ名のうしろ押執る娘はく月の

源後平

下ま乃あまの指く我交りてうしろうしろやまの娘のうしろ

月三の申一 連せは師

里のあまは流りを交りてうしろ月も娘はくうしろ

平重時納ま

あまのうしろゆきのうしろは月^{つら}のうしろをうしろうしろは波

後京基徳

ま古くくうしろくしろ此の國や映とれり女の娘のうしろ月

九月十三夜十三夜今名所月

控人納言實雄

奥は凡吹くのうしろは白母よ打成片みのうしろ娘のうしろ

入道前持政家のうしろはうしろ

後堀河院臣のうしろ

くうしろうしろの海く我の女の娘のうしろ月をうしろ

十三年のうしろ海は月 右近大將通忠

あまのうしろあまのうしろはうしろは思ひうしろ娘のうしろ月

うしろ 順徳院のうしろ

後京仲實納夫

誰よりもしも我ら娘をわづらひ独りこの月をみるまで

正治百三の申二 前入納言隆房

うしろ髪もかたむけし我ら娘の月しりとりみり交るるあは

月の申二 前中納言山家

しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

あはしは師

世なりともしりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

正三位山家

あはしは師の月しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

入道二品親王道助

あはしは師の月しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

後京信實納夫

あはしは師の月しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

あはしは師の月しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

源家長納夫

あはしは師の月しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

あはしは師の月しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

あはしは師の月しりとりみり交るる我ら娘の月しりとりみり交るるあは

土佐門院御親

妹のよこしをわけてまうし鳥のむらじゆ流より一月乳
建保二年煇十の三つちりけり

二位家隆

あへつてよのの京をさるあまのついでを松虫のおま

妹尊の中まを 前大納言忠良

あまのついで鳴虫を養ひ給はせを娘のむらじゆ

後鳥羽院御製

あまのついでの人路のゆき京うらむらむ松虫のおま

後京信実御製

あまのついで妹のきりくあまのついではひはひはひ

古所門院御製

あまのついで京の娘はひはひはひはひはひはひ

百三三つちり一付巻虫

後鳥羽院下野

あまのついであまのついであまのついであまのついで

歌一一人 正三位家

あまのついであまのついであまのついであまのついで

法下幸清

あまのついであまのついであまのついであまのついで

忠見

らるるなるを夢りかして暮れぬくは娘のよ成ありつ

和泉式部

妹の田よいづしよまわける^{いづし}をわ^{いづし}こまわ^{いづし}る^{いづし}の^{いづし}

紫式部

娘の^比いづし田の倉いよいよま^{いづし}る^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}

式子に祝と

そぬりすし田の娘の子か抱る^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}

正治百三十一 二位家隆

吹^{いづし}か^{いづし}る^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}

袖^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}の^{いづし}

二

らちのちるるをりりかして暮れゆくは娘のよ成わつて

和泉式部

娘の田のうづつとやけり^{いさひ}をわきまわつて^{あはれ}の^{あはれ}

紫式部

娘の^北うづつと田の倉いぢい^いま^い乃^いの^いか^いの^いこ^いう^いま^いり^いの^い氣

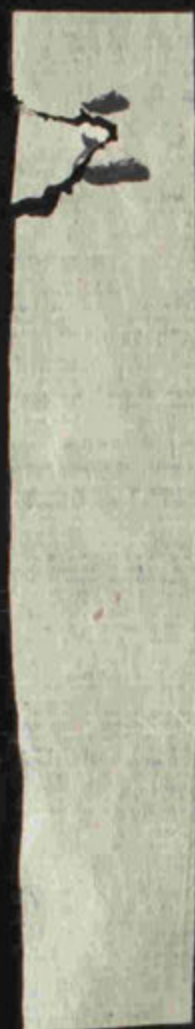
式子に祝と

そめりすし田の娘のちぢを^いく^い思^いり^いの^い袖^いも^い小

正治百と号し 二は家隆

吹^いか^いる^い影^いの^い草^い葉^いの^いい^いる^いし

袖^いも^いあ^いは^い娘^いの^いあ^いは



續後撰和歌集卷之第七

妹尋下

くぐく首首うめく我にわくくも掛衣

太上天皇

あしこしこしにのそむほむさかたふらふよ国よ交うた

并は女

よふふくねあぐの友こまきとぞ独り人の交うつこ

後京極持政家よ十昔三のよもはけるよ

前中納言定家

川凡よちつくる月のさじけれはうらうらくと交うた

各所うやけにわくくよ

後鳥羽院御製

中あうふ屋のそ凡月さく島野田の里よ交うた

掛衣を

土佐門院御製

あつらふさくくもあつらふさくくもあつらふさくくもあつらふさくくも

順徳院御製

かみさすうの里は夕景よ宿こらみね衣にひかり

雅成親王

いひおほ東日はいつとあつらふに到してあつらふ人の交うた

前日大徳家

最人納言為家

三田よりうのよみらのまよ結く我思松の松とみけ我

紅葉を

辰三位通氏

うひのくるとはあまのついでのお笑ふてあはれに

古所門成也製

かへりよふらむお笑ふまうこいま古の母あいらうじ

春議雅純

阿あぢゆへもはらうのあいらうの錦とまほらう

は成さ入道前持政也月の此宇治はあつたけの

又またはく紅葉をわく都ちる人のまはらう

にらすして

辰一位倫子

と我を成わぬらうのちまぬまは里人の成思つるかふ

ぬ

枇杷身左后官

あまのにわくこいみはあまのあまの路をうらう我

寛平中はまきこいあまのあまの

よみ人

煉らうらう我をのあはれはさいかあはあはれうじ

煉の中

惠慶法師

紅よりうらうのいすあまの煉のあうことあはれけら

宗縁法師

よ〜〜として三年の伊次と娘は年々の久よとに
参儀絶感

娘身乃〜〜ゆよみゆるお糸もよまの〜〜錦あし
建保三年の久良家百〜〜うよ遠村お糸

前中納言定家

よ〜〜のお糸のあ〜〜う〜〜けお〜〜と何と〜〜お〜〜み〜〜か

歌〜〜子

土佐門流お糸

あ〜〜ら〜〜う〜〜橋は埋れてわ〜〜と〜〜娘の〜〜里

順徳院お糸

〜〜何娘と〜〜水の〜〜う〜〜あ〜〜と〜〜の〜〜あ〜〜か

大藏卿有家

娘の〜〜と〜〜と〜〜境に〜〜お〜〜と〜〜に〜〜の〜〜ら〜〜

百首可^{とら}なり〜〜河川紅葉

太宰権帥為経

ゆ〜〜水の〜〜ら〜〜と〜〜わ〜〜子〜〜飛鳥河娘のお糸の〜〜と〜〜

歌〜〜子

よ〜〜と〜〜子

是〜〜川の〜〜路は娘う〜〜ゆ〜〜ひ〜〜け〜〜と〜〜我らお糸は〜〜は〜〜

清慎乙女屏風は 貫く

何〜〜る〜〜秋〜〜の〜〜月〜〜こ〜〜う〜〜ち〜〜う〜〜お〜〜し〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜

田家お糸と〜〜つ〜〜らんをよ〜〜み〜〜は〜〜ける

法性寺入道前用白名取末

かきつる万草の香の妙をわきま向しはよも回をうり

歌——子

基後

吹ちし寸草のわきま向しはよも回をうり

建也二年九月詠言を命ずれば依し向し中娘興

前大納言為家

深もあつす^{まろち}あまふまにとも向しあまをあつし娘凡う吹

娘言中よ

後京伊副納未

娘のゆくりも向の名も^{ゆり}持て又紫やあつしあまのあつ

後京親^経継

片名くもつらの錦袂はよも娘のとも向のまろちかきつる

娘の言^れ言

後京清正

凡吹いあつしちりふともつら^こ持すも娘のまじをる^れれ

和泉式部

我もあつしあまのあつしあまのあつしあまのあつしあまのあつし

殿富門院大輔

ぬらひあつしあまのあつしあまのあつしあまのあつしあまのあつし

前中納言^い為家

いづれあつしあまのあつしあまのあつしあまのあつしあまのあつし

祐子の親と家言合よ

紀伊

そしよきく娘のみるし凡よ^らぬらちの娘^らを

百^{そら}の^{そら}詩^{そら}一^{そら}回^{そら}暮^{そら}娘

旅人納言基良

幾娘^{そら}の^{そら}我^{そら}也^{そら}しり^{そら}ち^{そら}お^{そら}じ^{そら}し^{そら}の^{そら}あ^{そら}つ^{そら}と^{そら}く^{そら}に^{そら}か^{そら}な^{そら}に^{そら}て^{そら}

旅人納言實雄

より^{そら}の^{そら}あ^{そら}ら^{そら}ん^{そら}ん^{そら}ま^{そら}え^{そら}ん^{そら}我^{そら}ゆ^{そら}き^{そら}原^{そら}う^{そら}の^{そら}我^{そら}て^{そら}は^{そら}娘^{そら}の^{そら}別^{そら}後

秋^{そら}の^{そら}我^{そら}の^{そら}言^{そら}之^{そら} 後^{そら}原^{そら}教^{そら}雅^{そら}納^{そら}未^{そら}

物^{そら}を^{そら}乃^{そら}る^{そら}る^{そら}し^{そら}を^{そら}の^{そら}用^{そら}に^{そら}系^{そら}し^{そら}の^{そら}我^{そら}の^{そら}言^{そら}之^{そら}か^{そら}ら^{そら}我^{そら}か^{そら}ら

藤原信實納未

紅^{そら}糸^{そら}の^{そら}を^{そら}凡^{そら}よ^{そら}ゆ^{そら}寸^{そら}る^{そら}は^{そら}向^{そら}し^{そら}也^{そら}と^{そら}ち^{そら}り^{そら}わ^{そら}す^{そら}秋^{そら}の^{そら}後^{そら}

皇^{そら}々^{そら}后^{そら}ま^{そら}え^{そら}大^{そら}使^{そら}後^{そら}成^{そら}

山路^{そら}を^{そら}そ^{そら}く^{そら}り^{そら}し^{そら}月^{そら}と^{そら}あ^{そら}る^{そら}あ^{そら}を^{そら}推^{そら}て^{そら}く^{そら}る^{そら}娘^{そら}の^{そら}言^{そら}之^{そら}

堀^{そら}河^{そら}院^{そら}の^{そら}言^{そら}之^{そら}言^{そら}寺^{そら}わ^{そら}け^{そら}る^{そら}海^{そら}

祐^{そら}子^{そら}の^{そら}親^{そら}と^{そら}家^{そら}紀^{そら}伴^{そら}

と^{そら}思^{そら}ふ^{そら}た^{そら}あ^{そら}ら^{そら}わ^{そら}る^{そら}我^{そら}人^{そら}よ^{そら}あ^{そら}ら^{そら}ま^{そら}さ^{そら}し^{そら}お^{そら}の^{そら}娘^{そら}の^{そら}言^{そら}之^{そら}

歌^{そら}一^{そら}し^{そら}

素^{そら}性^{そら}は^{そら}師^{そら}

と^{そら}ら^{そら}あ^{そら}ら^{そら}道^{そら}に^{そら}し^{そら}も^{そら}れ^{そら}し^{そら}わ^{そら}ら^{そら}し^{そら}

い^{そら}く^{そら}よ^{そら}ら^{そら}の^{そら}娘^{そら}の^{そら}あ^{そら}ら^{そら}し^{そら}

續後撰和歌集卷第八

冬三哥

道助は親王家の又十三哥の初兩

藤原信實朝来

冬三哥の初兩の初

冬三哥の初兩の初

冬三哥の初兩の初

西行法師

東三哥の初兩の初

大炊門右大臣

冬三哥の初兩の初

土御門左大臣

冬三哥の初兩の初

正三位左大臣

冬三哥の初兩の初

冬三哥の初兩の初

太上天皇

冬三哥の初兩の初

冬三哥の初兩の初

冬三哥の初兩の初

飛田大老 家

吹らるる花うしうしうと見ればに我るも多きはみわし
後鳥羽院の御製

多のりるもしう乃柄いるもしうこの小野は西のちりなり
私泉式部

外はなるほつこのかじくえく我るもくも多の成まらるは
相摸

く乃く波わりの凡ちや比まらるるくくく乃はほちを我
寂然法師

ゆ我く又由この板はよ福をくく西向の多に袖也くくく森
西行法師

く我くし福を乃底まきくゆわくくくく又紫也か
紅葉は水くくくくハ條合致大老

木くくをく著乃わくくゆわくくお紫志くくく河の伏
延喜七年大井河よ新章時

坂上是則
お紫くくの落くかくく大井河く乃志くくくくく

各取言の書けり
前中納言山家
大か河の女くくくく(思くくくく)の母路わくく有る

家百くくくくく

河内権政丸太夫

大井河のせ乃志つゝさけてみち紅葉のいづもささる思ひ

落葉のいづも

藤原信實納女

し月のつとをちりとりわの宿のをたまたまを後らふま

皇太后宮人末後成女

ゆきゆきとくさくさよにゆき人よりおのれをのりて

同融流よ一本草まじりし二草

尚侍後京灌子朝来

とく我に、あつとけりむを我にすのりてあはれり

清ら

同融流は製

いかにとあるをさうさう何事とてなをさうさうさう

後一葉流は両中官外流より結ゆけり、唐申は

水月照み草こころをよとゆけり

指入納言長家

あつとくさくさうさうさうさうさうさうさうさうさう

建保六年の裏の合さし

前中納言定家

冬の日にようよきさうさうさうさうさうさうさう

歌一節子

大納言通具

野はさくさのさくさくさくさくさくさくさくさく

冬月

後京純朝朝下

冬月廿八日 後京純朝朝下

元久二年冬月廿九日 後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

後京純朝朝下

百三言草 河池水 後鳥羽院下野

いゝ又まういね水はねをこめあまににら池のいゝ車

天曆所^{ヒク}河屏^{ヒク}凡^{ヒク} 中務

あまら池乃みさうい水鳥のしつをに流とさううまはり

江邊水こいつらんを 指中納言長方

みやういんじく吹くしめじの所まこの入ははらうのけり

久世百三言よ夏 左京大夫政頼

うらわこよほえくうらけらえのくをち枯葉よ夏あま

河らんを 後京極指政前を政人

天河もをじす人足原のいけいけいあわいあわい

前中納言信家

あまの志にのさうやめいんういより力のををいみる

いん 人丸

よをいしと朝たを明^あけくみ我いをらうい雪海江り

井よ丸人

ぬのい乃思かにいしらすののいおむいゆれら白ゆい

指大納言信実

向すいもい板の道と跡うい雪ふつとよけま衣ういすま

入道前指政丸人

あまのいふらの思いあまをう雪の白ゆいりあまをう

道助は親と家の又十と云ふ松雪

前右大臣

ワッ翁はけこゆる雪は^{うら}握てねるは凡のそしに我とき

後二位家隆

草の京り我りし人せしときわねごの松の雪おれ

西園寺入道兼右大臣家三子と云中一

藤原信實朝臣

下おれのそし之松の志もしく雪のそしなるは

雪^{うら}言しく

中納言資季

ちりやちり三日の秋枝今さるは雪のそしは

松のそしは雪のそしは折て人のそしは

雪^{うら}言しく

紫式部

おくの松葉よはゆる雪よわしワッ方よゆるは

雪^{うら}言しく

後鳥羽院朝臣

冬山の雪ゆるしとるまるとは

雪^{うら}言しく

後京極持政前右大臣

山里いづくの雪のけしは

雪^{うら}言しく

宗蓮法師

在乃雪はくしをわしは

安土門院早斐

道助は親王家の又十^三等^一の惜歳暮

西園寺入道前太政大臣

思ひつゝいふ言ひのこゝろにさきくつじつふ^る年の言

し又百番^の言^はし 拙意^は兼宗

はわ^らぬ^れは^はの^いつ^しと^まり^い年のくれをう^めん

大和まよ^よみ^くけり^ける百^の言^の中^に

前大臣正慈鎮

つた^き司^つと^しを^あり^て志^の物^よ年^の言^はし

志乃^の後^の年^の言^はし^によ^りて^はけ^り

皇太后宮大夫後成

中^の言^はし^によ^りて^はけ^り

年^の言^はし^によ^りて^はけ^り

續後撰和歌集卷之第九

神祇部

百首言^{ひやくしゅごん}けりしは寄^よ社^{やしろ}祝^{いほひ}

前太政大臣

煇^{あき}傳^{つた}た乃^のよりし^の國^{くに}は^はた^たと^と我^{われ}の^いみ^み

神祇の^{かみ}言^{ごん}を^をよ^よも^もを^をお^おけ^ける

土御門院御歌

老^{おきな}を^をい^いま^まく^くの^の業^{わざ}よ^より^りも^もを^をて^て神^{かみ}の^の國^{くに}も^もた^たけ^けて^てか^か那^な

太神^{たいかみ}言^{ごん}よ^よみ^みく^くを^をけ^ける^る百^{ひやく}三^{さん}の^の中^{なか}に

皇太后^{すまみ}后^ご官^{くわん}人^{にん}丈^{ぢやう}俊^{しゆん}成^{せい}

宮^{みや}ね^ねた^たる^るに^に老^{おきな}の^の又^{また}十^{じゆ}餘^{じゆ}何^{なに}す^すに^に代^{しろ}す^すま^まう^うり^りけ^けと

十^{じゆ}首^{しゆ}言^{ごん}合^{がひ}に^に社^{やしろ}願^{ねが}祝^{いほひ} 太^{たい}上天^{てん}皇^み

わ^わつ^つ寸^{すん}息^{そく}の^のく^くに^に寸^{すん}両^{りやう}を^をい^いす^すに^に川^{かほ}ら^らく^くは^は中^{なか}を^をて^て傳^{つた}へ^へる^るを

九月^{くわがつ}十三^{じゆ}日^{にち}十^{じゆ}三^{さん}言^{ごん}合^{がひ}は^は各^ご所^{しよ}月^{げつ}

前右^{まへみぎ}大臣^{だいじん}

神^{かみ}祇^ぎ言^{ごん}を^をい^いま^まく^くの^の又^{また}十^{じゆ}餘^{じゆ}何^{なに}す^すに^に代^{しろ}す^すま^まう^うり^りけ^けと

入^い道^{だう}前^{まへ}持^{もち}政^{せい}家^か言^{ごん}合^{がひ}は^は切^きり^りを^を

前^{まへ}大^{だい}納^{なつ}言^{ごん}為^な家^か

い^いす^すに^に何^{なに}神^{かみ}代^{しろ}の^の鏡^{かがみ}の^のけ^けを^をい^いま^まく^くの^の又^{また}十^{じゆ}餘^{じゆ}何^{なに}す^すに^に代^{しろ}す^すま^まう^うり^りけ^けと

社^{やしろ}从^{したが}月^{げつ}を^をい^いま^まく^くの^の又^{また}十^{じゆ}餘^{じゆ}何^{なに}す^すに^に代^{しろ}す^すま^まう^うり^りけ^けと

持^{もち}入^い納^{なつ}言^{ごん}を^をい^いま^まく^くの^の又^{また}十^{じゆ}餘^{じゆ}何^{なに}す^すに^に代^{しろ}す^すま^まう^うり^りけ^けと

後古所門けん末

秋とみくすつらみち井とよはるる道よりりま
大納言通方人ぐすめく情文ま〜言合し
休けるは社頭月をよめら

は眼堂禪

三つりる久〜と世よりけりあわぶく三つは月う響くわ

賀茂社よほり〜とまり〜とわて休けるは下社よ

みく寺りける 祇名ぬ末

さつ乃かふかとの又川のうお〜を思へ〜や〜の海連り〜

後一室所信よおまし〜ける所賀茂社より幸ら

けつ又のわれ納選子り親王のゆはまのにわてよ

上東門院

ま〜つ〜賀〜の河原より〜とや〜の志る〜めえ

皇太后また後成し〜と述懐する春日野の

井〜ろのなれしよれ休す〜と秋の志る〜わ〜

と〜よ〜と休けるを前中納言は〜家ら〜と

ゆ〜と参議よは〜と我は〜朝かの言を思〜

概中〜と〜して 大徳入道前をぬ末

ふ〜乃お〜ろの道の言れ〜を〜と〜と秋の志る〜と
此れ

指信正田終人〜と〜とは〜と所す〜と〜と

日林祇

素後法師

春日なる三つこのふ乃まねてしちりいふもなりとす

佐吉社よりうづつて来子の奇らうと林を経國よ

向を休ける

前中納言定家

佐吉乃松のわづねしはるいのみしりけりかみかたりし

同社よりうづつてよみ休ける

前太政大臣

松のよはるてし浦のまことうにい佐吉をわづねて我々

本社にうづつてよみ休ける

律中國平

つゝをまじりのみしきこわらふよはにわりの林のまじり

後三条院佐吉より御幸をける日よみ休ける

太宰権帥侍房

干時
春藏

ふしんせいの文章のまじりて天とさうとすみよりの林

太宰大貳實政

干時
左中弁

もろりけるるるの文章は佐吉の松をむさくゆいし社を我

歌しし

前大納言光頼

佐吉の松のしえは林をいりてゆいしけるるるはしは

鎌倉右大臣

のまじりかきつししし佐吉の松をいりての年つて

建保三年又と云ふ今も松経年

後鳥羽院片断

ついでこのちわいの亮丸幾久と云ふ松^との松

後は性寺入道兼用白家百三三の

直輝門院丹後

永代より入つてわんすみ^のの松の年や根^と

号みより入つてよる

持大信於保寛

わんすみ永代より今迄は吉の松のみつて

之輪の社より入つてついでにけは

前大納言為家

みわりのつちの枝はわんすみ永代より

建保二年三月熊野より幸^りはつて

永代^{より}を思つてついでにけは

前大納言

年をくつ又わんすみ永代より

東三条院の二十賀屏風

源道深

永代より入つてわんすみの松

永代より入つてわんすみの松

古所門院抄

林らちやうくらく人の袖のよも非代をけくのは月を
百言の寺てらは言の社祝

指大納言實雄

井垣やみ宮の林ゆけくいのち八も代とわの鬼のさ
えくくす

年ふれこふとからく世をのこくしんれ移る柳糸
日吉社よふみく寺てらけくの中よ大宮

後京極格政前右大臣

いふくの霧の林もちるむのくしんをよふく志の海凡

十禅師言

来乃ししは世をてくえくく道ま有明の
月社よふみく寺てらけく

前大信正慈徳

豊のふめつ月の月めくくとよ我之松のゆしん

入道親王尊快

アくくく寺てらりよし又換かつふくちんを愧かのううを
取真子まこ宮みやよふみく寺てらけく

持女信都良伝

かくくく寺てらりよし又換かつふくちんを愧かのううを

大納言よなむりくしん申又日吉社よゆりか
よきゆー 前大納言為家

老しく乃おつのうら世に彩つとし我わゆるを非やう能
思く世まよふりくわじまのこはゆりおは
よ本社の一のこはゆりくわじまのこはゆり
我ハ 祝部成茂

捨りく寸ちわはゆりく教うり社も核の床で居けそ
かしてゆりかじくゆりけ我まわゆるをそ
ましく種あくつこつとわゆる社まわゆる
のふつとけるるましくゆりか

契をこし種代のこをわを我すい結し物を志のこ
小野官よよみくゆりまじつとける

前大納言為家
契をこし種代のこをわを我すい結し物を志のこ
こはゆりかじくゆりけ我まわゆるをそ
ましく種あくつこつとわゆる社まわゆる
のふつとけるるましくゆりか

ちるやわゆる社のお世よわしゆ我て後まへるまのや思
元慶二年日吉社竟宴彦波御衣鷗鷗羽草
不合尊 兵部下平康親と

こはゆりかじくゆりけ我まわゆるをそ
ましく種あくつこつとわゆる社まわゆる
のふつとけるるましくゆりか

月六年月竟宴思兼神

之統る忠

こころよき鳥のおまもりと忠たぐらむりある世に功初ける

天見屋根令下 橋仲遠

いふ事もおまもりをわけて月かきしに後いさつゆら

井奥のこころよきものつら

まじりのこころよきもの樹のたをけりよきまじりに
人むしをむしとのたよまなしいに我のねさつ祝うめん

此の日記の文よきまじりて午日のちりしものつら

こころよきものつら

續後撰和詩集卷第十

釋教寺

天平廿一年いほのふれりしをりりか
けり遺戒寺 大僧正行基

かつらめの宿り我う今こころを思ひし佛を
天名大師の忌日よみかへ

大僧正慈惠

う乃のいの井の庭よわきかき草の庭
信正遍昭よりけり

信正静観

年をくくいめいめさう電の山喜悦の
歌一子 穀空上人

何ゆへやをわくの我女はけしう入月の
ふのちちぐかうく月をかく弾室室入る

みゆけり 高井上人

ふらふらつと入を心月といれり
無量義経徒徒一はけ

大僧正證観

去後乃の文くまかこめり
法華経譬喩不号曰華光如來の心

法下隆弁

かよひのこころのさよめくはまを月日のこころか
前入信正慈徳

ゆかりの燈のさくらをこころしんはるよひの月
法務寛信

入思の思のこころ月歌のわいのあめをこころ
法文百の言よまはけりよ喜薩清涼月抄お畢

竟るの心を 素賞法師
暁る^{あきら}しる^{しる}こころは月とくの女よこあかりを
に玉鏡の心を 鑑子ゆ祝日

ちりまのこころのこころの^{こころ}あつたわ
恒順衆生

うれ^{うれ}こころのこころの^{うれ}か
歌のこころ 赤染素門

我のこころのこころのこころのこころのこころ
小野上宮の堂よあつたはけりよ懺悔のおまじ

のこころのこころのこころのこころのこころ
康賢王母

こころのこころのこころのこころのこころのこころ
上東門^{のり}はるこころのこころのこころのこころのこころ

後八^{とら}誦^まはけりよ
後八誦はけりよ

てうく^{なから}しりして 右近大将直徳母

こぢふるの流の寸まわく寸たいてい寸のなより

天玉ちよはうしてよみかける

前大信正慈鎮

ちよまによ人の祓いをしてに塩をあそくうかき

打さ^ひま^り

前大信正

ま^りのあまの氷をてま^りてあまのま^りのま^り

枝ちよ戒師^{こま}ちよ^りてよみかける

介うま^りのま^りのま^りのま^りのま^り

前大信正慈鎮天台座にちりく勸学碑也

い^まま^りを^りあ^りて^りを^りあ^りて^り

後京極持政前大信正

み^りのま^りのま^りのま^りのま^り

日吉十禅師^いま^りのま^りのま^り

前大信正慈鎮

は^りのま^りのま^りのま^りのま^り

て^りのま^りのま^りのま^りのま^り

吹^りのま^り

續後撰和歌集卷第十一

徳哥一

く

よみ人しる

あふりなるちののまじもまおしとつあるの思ひ物乞
いと川をむくむとのみく我しふこ人

人磨

磯乃くへおひころわのた成せし人

伊勢

あふりなるちののまじもまおしとつあるの思ひ物乞

讀人不知

夏乃野の車しこく我り火のこ思らわら我しと

寛平はほきこのまね言合の

へ我す下にふるまはしこく我り火のこ思らわら我しと

あふりなるちののまじもまおしとつあるの思ひ物乞

奥の志ののまじもまおしとつあるの思ひ物乞

堀河はは敷書の言を人しる

あふりなるちののまじもまおしとつあるの思ひ物乞

大納言忠教

へ我す下にふるまはしこく我り火のこ思らわら我しと

如

禎子り親は家持律

無病の心もさへにみこし思ふ方又何よりなるらんらん

同敷書に

持中納言國信

かみおぬらしにりくも神は朽もてくさるるもくさるる也

志乃中一

左京大夫源頼朝

いとまじおぬのわのまじいなる世をくさるるに

後直は師

我志に人し思ふのしるなるるに

鎌倉右大臣

つらきににりあいのすくえ人しとくぬら

武子日記

ちちしちむらさき人し草のうめは

いとまじいなる世をくさるるに

らに信光家

ちちやにちむらさき人し草のうめは

信光草紙

雅成親王

ちちやにちむらさき人し草のうめは

百の草紙

殷富門院大輔

ちちやにちむらさき人し草のうめは

て

日記を 録名有大夫

かく我々のまじりて昔のまじりて我々のまじりて
女のわいのりるまじりてけりてけるまじりて
こころはける 源重光

まじりてふくのまじりて思ひまじりて我々のまじりて
思ひのまじりて 後京極持政家令大夫

まじりてまじりてまじりてのまじりてまじりて
家六百番号合ふ

建保二年のまじりて家令のまじりてまじりて
建保二年のまじりて家令のまじりてまじりて

元中納言家

多神まじりてまじりてまじりてのまじりて
左京大夫源補家令のまじりて

清補朝長

伊予嶋のまじりてまじりてまじりてのまじりて
意馬の中よ 元久納言基良

いづれまじりてまじりてまじりてのまじりて
九月十三日十番号合ふは宮の姫君意馬

鷹司院侍

なまじりてまじりてまじりてのまじりてまじりて

百三十一のうらむらむら

後鳥羽院御歌

思ひの心はわたのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

よきのうらむ

持入納言宗家

に秋もあつきのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

内侍持政家可くうらむ

ほご行能

は言乃すこのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

うらむ

宗縁法師

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ち那門院小宰相

思ひの心はわたのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

入道前持政大夫

通つてつたのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

皇太子后女

いとまき思ひのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

式子日記

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

九月十三日

二風左大臣

焼くよう我が心かへりわらさぬくはよしのつす下の思ひを

丸を大拍子雅

煮よしくきてもくは後乃焼くよあひまを人よきくすな

弁ひ休

わらさぬくはよしのつす下の思ひの焼きしよの結し

百くすのすは宮の焼く志

源後平

いぬよまきくおく下の思ひの焼きしよの結し

思ふ志

赤磯為氏

きく我るん別しよまけくたよまきくゆら思ふしよ

志のすし志

皇太后之入史後成女

きく我るん別しよまけくたよまきくゆら思ふしよ

人くよすくすのすまけく我しよ

太上天皇

思ふ志のすし志のすまけくたよまきくゆら思ふしよ

十背の今よ思久志

古所門内小宰相

人く我思んよわす年月か今こわ我る結しよ

おあし志

女おひ休

きく我るん別しよまけくたよまきくゆら思ふしよ

おあし志

女おひ休

意の中

素遣は師

神よのきじくじらういし思ひしめをられ潤るあり

蓮せは師

ましと信思りしこ思ひに我ぬりやありおにらあ

白の車

祝部成茂

ましとや尾むりしこの草の名よおるあな家の清思はと

意

後執柄末

若るつと水け草の下居つとて我思意の潤るし

基後

櫛わこのおりの下まきこのまふ我に袖うきけりあり

後は惟も入道前用は家百々等のよふはけし

思意

皇太后文太史後成

人とり神をいあこいけりしるまのまといつあへ森

刑アツ頼輔家尋入るよ印しんを

前参議教長

るまし何にけりしめいせやつ我けり我よこころまあつて

意の中

式子け祝

志の各よおまの神をけりしめいせよ用りしる

百々尋りしこれにけりしよ高滝

太上天皇

一子

しつし海乃ちいづのうこと後わはるるをいふこと
つらうかじしとちと人しはすも人のちとく

皇太后之大長後成

若多りともうかく我々氷のけりりみく袖也

殷富門院大輔

水阿らめやのよしはるこは草又にいふくとも

入道前持政家系十の奇令よは言枕也

源家長納未

こと枕うつをの候よとすまのありては路よとすれう

言形志こいんまを 持大傳都有果

向れよこにみ思夫のうのわよ小母いりりはよちう

志の中よ 持中納言後建

ちう海つこつこ母のぢすわのうのうのつとせれ

藤原道純

かうう浦田の候ちうらひちをみうり人のちとて

徳賢門院堀川

女あふるるをよらう乃阿守鏡らうよとくし袖のと

和泉式部

くくいひししはとあうととまやへんうそのり余成を

續後撰和歌集卷第十二

恋奇二

恋しぬす

柿本人丸

かたのこ恋しぬすしむきつら命とまはしむ年いなり

貫之

あこみころ目とまりとゆらぐ恋のそらち逢より

頼めけら男のえまらじくゆらぐよう申けらぬ日年

和泉式部

逢しの有するマとみとて後るを玉のそらけり

恋奇の中よ

伊勢

あこみとあゆみきつら命のしやうはあこみ

持中納言定家

に我るを歌くとも白家の清きよらぬく人命とまは

右大臣よゆけら家又百三つよみゆけら

恋奇

後信性ち入道兼用白を教下

あこみとあゆみきつら命のしやうはあこみ

後五法師の命よ 道周法師

あこみとあゆみきつら命のしやうはあこみ

郁芳門の命よ 修理左大臣の命

あこみとあゆみきつら命のしやうはあこみ

ましろは思ひつゝのふりあはしにふかきくはれし

皇太后宮大夫後成女

思ひあめあすりおに道とるさこんまうりふかきくはれし

いりきりけるほにの人はいりける

本流休後

ふけさじくわなむかじりまうりあめあはるる袖をさせ

各所百三言りけるは

順徳院御製

すのきやちの思ひのこしむきいりくの人めうりける

五十言のふりまうりける

入道前抄収た大巻

笛竹のちよりの思ひすの庭あめあはるるこ独りし袖

恋言の中

三三三三三

ちよりのあめあはるるを思ひこしむる人の月をさるる

建保四年百三言り

前中納言定家

あすすの月ようれくぬをう鳴命よじり物あはるる

恋言

式子の親

のをあはしてころ月小人をれすかきくはれし袖のさるる

百三言のふりまうりける

藤太政大臣

わが身をまじらふとて一圓の袖の女をこゝろのまにけり

恋三郎申よ

辰三チ位頼氏

けくみ思ひ入りやをさる人まてようまにこゝろの袖の初鳩

^(うた) 皇太后宮大史俊成

^(うた) けりて思ひまのふとほほおきて我りかほ袖のうは

^(うた) 喜子地にうりけりけり女にけりけり

源貞種

^(うた) ちよと成わりの浦よけのうらふらうらうのうら

歌一巻守

よみ人

塩の海乃しとてうらむる娘とてすぢあはけりか

みらるちちのうらむちちのうらむちちのうらむちちのうらむ

いと乃海のそのうらむちちのうらむちちのうらむちちのうらむ

中納言 家成 家三のうらむ

後京 通 寛

ちよと成わりの浦よけのうらむる娘とてすぢあはけりか

恋のうら申よ

鎌倉 右大臣

ちよと成わりの浦よけのうらむる娘とてすぢあはけりか

家よ白のうらよけりけりけり

後には性も入道前用白を致す

いぢりぢりうさうわまへこいよいよとてしほし神也

久世百首うよ 郁芳門院女聲

ををのこすのういほ塩をて焼やくこも袖をくくはは

歌一十 式子の親

へしれすお思ふ神よくくくくくくく塩の浪の

源家長納

ちく流乃わしめはさのうる我松かく世文のくをい

友系親盛

よくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

源重

思ひつれつうまへくくくくくくくくくくくく

藤原道純

おとつういぬこの海古と我しやかくゆきて袖は

鎌倉右大夫

うらなみのこをうらなみのわまは世我交ぬくくく

通助は親王家又十のうらなみの煙

中納言定家

いたきしわさうくくくくくくくくくくくく

辰二位家隆

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

思ひ徳方成じうへて河江は又さらうつと志しうを

宮の船志 河津橋政丸大志

みる色なること志りにのちまはさり舟をばうそまう我て船

各所奇あまうしよんをたけり申よ志

古市門地志製

わらうらなるしものまけらるしもの志のち中の信しを

志三乃申一 京極前用白家肥後

岸せらるしなるしものけの座を我い志よ志にせらうせら

志又田也志

まじりつらなるしものけの座を我い志よ志にせらうせら

藤原永克

まじりつらなるしものけの座を我い志よ志にせらうせら

源家信

まじりつらなるしものけの座を我い志よ志にせらうせら

河津橋政丸百首奇よ不達志

辰三後行法

まじりつらなるしものけの座を我い志よ志にせらうせら

志のめ志 指中納言長方

まじりつらなるしものけの座を我い志よ志にせらうせら

結賢門地堀河

一 志三郎の志
前大僧正慈鎮

志三郎の志
前大僧正慈鎮

志三郎の志
前大僧正慈鎮

志三郎の志
前大僧正慈鎮

志三郎の志
前大僧正慈鎮

入道二不親王道助

志三郎の志
前大僧正慈鎮

入道前橋政家言合よ言の島志

源家清

志三郎の志
前大僧正慈鎮

石川島女

志三郎の志
前大僧正慈鎮

世中乃... 思... に我... け... け...

兼盛

... 意... 費... せ... け...

... せ... け...

續後撰和歌集卷第十三

意尋三

人よぬま... 女喜御歌

世をへ... 吾人頭... け...

九条大炊

... 歌... け...

... せ... け...

和泉式部

夕ゆふよよ浪なみここししのの種たねいいじじのの髪かみここののそそらら
 ぬぬのの光ひかりけけらら男おとこここ言ことしし有ありしし令しるし下くだわわららああとといい
 夫おとこののああららししみみここすすららわわけけららぬぬららしし

三皇院女御人丸也

中ちゆうののああららししみみここすすららわわけけららぬぬららしし

意い中ちゆうにに

前奉職教長

わわららししみみここすすららわわけけららぬぬららしし

ととららししみみここすすららわわけけららぬぬららしし

殿富門院大捕

ああららししみみここすすららわわけけららぬぬららしし

意い中ちゆうにに

皇太后宮大史後成女

ららししみみここすすららわわけけららぬぬららしし

小休辰

後のちととみみくく違ちがひひををああののしし令しるし下くだまましし我われととままりりののいいししんんをを

契結意こいふ事

平長時

ききののししららをを又また後のちつつとと思おもひひててししなな成なりてて我われととままりりののいいししんんをを

意い中ちゆうにに

奉議為氏

後のちととみみくく違ちがひひををああののしし令しるし下くだまましし我われととままりりののいいししんんをを

と西門院兵衛

よひのゆゑに終へんやあぐさじこ今えうこよれめをうるし
後多抄後出製

つゝまにゆつたましよ書同よりうらま七月の氣を西に
ふは百こつちのちけにわくこよ

此言こましのちうへにゆてに子とてしこの月のうこのち
一色三の中よ 二条院讃妓

あまにこころしうすもいほ核の戸よいそとぬさうまの月
百首三のち^{まはつ}は書月色

入道二公親王通助
あのをとてしじりうこころのゆゑ更ゆく月を終ゆらかる

まゝ 中納言家持

今まこころ終へぬやあまの系ちけに終いよはよをう
藤原克俊納末

あつすにりうまもいふのこころいよまたいよそはし
後系仲実納末

今まこころあまのちうへにゆく有切の月をこゆや
中納言賢季

あつしたに終よあぐさじのこころは出るとししうの月
大伴女^娘郎

吹風よぢいこと志るし思ふし我よいと枯の下草

一ノ目

ツノ思ふふとち受くみらぬくのちのほのほのほのほのほのほのほ

よみ人トナ

梓弓をこみひのすしりしよかりんちよよわのわな

まきふ美意こころんを

ほ三位執政

かじこすろわよのしりしん焼さのころころいそ我こしけ也

堀河池も百そろのまけるほ初逢^{こころ}也

基後

三坊江乃入はよかりふ白すをのまき也人そとほ三坊

久安百首の中よ 皇太后またま後成

あしよふ向のよまけのす花かりしこまう神也よし

前大納言隆有

おうのに我結くもろ月を我いれりけなも也有明のそ

真己

あつしとらんまゆり思差路をいけつあもいし(と)ゆり

と意中のよ 神祇伯孫仲

うらぬら美のころなけしにら切あもよれ神をけれに

あの一いほりかこ物けり後いもの時けれに

よみ人トナ 業平納言

いづくの鳥のみこし人し我す思ふに海によちるこ
兵部元良親之家言今よ嗚別意

よみ人し子

下級乃ゆにを鳥のなまこけこの別よ我す嗚也れ

入道兼持政家言今よ宮の鳥よ意

河院持政左大夫

鏡の言いか成ゆここのすしひよ又書る子もは後

後朝意のんを

兼大儒正慈鏡

こひて違よの書をうつこもとる子もは鏡の言か

兼起法師

うさ乃被もかろるこいこ恨うよわとん又ほさかみ我

藤原克俊納也

違坂人の別乃道か我いゆにけ鳥のなり思すしる

皇太后宮大史俊成

嗚のつと我をさくくくくわい思しを恨けりる

家百多言に後朝意を

河院持政左大夫

嗚いゆはとさくわつと狹小筆のわいおよこすのえ

甲らんを

土佐門院忠光

わいゆの洞りちをさみそつとつとつとつとつと月乳

尚休家中納言

よらむなるわがれ有明の月朧よりいそぎこころおこ別るは

春濃為氏

きせくの別へきくうとゆいそうみありわつと明の月

西園寺入道兼左大臣

みくとも我や移けしこころありけと意つころ夏のうきこころ

更衣源清子よらむとけら

姪島卿兼

朝家のなうらなとけしむくを明へのと結みうほりは

歌一十寸

左大臣納言

霧よりくつら夜よりいそぎとてうきせのつくも

女のししよりゆき納言つくりけら

道信納言

あすかりとらかりけらふけと我ありおこきつし

雪かりけら朝女のししよりゆきつくりけら

左近大将朝兼

あすかりとらゆきみよの白雲いみらとるこゆきつとわがれは

歌一十寸

うきと我にわらふとせしむらと越路の雲こころにわらは

歌一十寸

葉子納言

逢ふくはくしつ到しにを河増の火なる我て逢くはくしつ

清懐ふつりける 中務

わいごの後さ(もの)あくはくしつに枝は後のしつりよき

あつりける 清原深養文

うしつにさくのむはあくしつに枝は後のしつりよき

あつりける 業平朝夫

業平朝夫

しつりよきと逢つりけるしつりよきと有しはあつりよき

あつりける 真子院抄

真子院抄

言わくしつりよきのしつりよきのしつりよきのしつりよきの

あつりける 和泉抄

和泉抄

逢ふくはくしつにを河増の火なる我て逢くはくしつ

あつりける 清女納言

清女納言

あつりけるしつりよきのしつりよきのしつりよきのしつりよきの

あつりける 平忠盛納末

平忠盛納末

逢坂の園らあつりけるしつりよきのしつりよきのしつりよきの

後京伊克

何きよなるりりわし東路へ越くるる相坂の用

藤原内納

東路にゆへわしこころしくうごまかす人は用ちいあ

百三三のすし^{しん}は^{しん}馬

思ひよこしてしりし相坂のまにこわこふ同多我はこ

よ^の中^のあはし師

し長らしておのりゆあふかふのたはしりしあ

冬^のとほこる人^のはにりし

藤中納言定家

いつきあつてわを恨ましくなるのんかきしを

物^のゆかりけり男^のこ^のゆ^のの^の今^のあ^のより^の事を

こまはけり^の和泉式部

おしし人の今^のあつてをくゆに^のあ^の思^の方^のた^のう^のか

人^のよ^のゆ^のり^のと^のける^の光孝天皇御製

治^のして^のま^のほ^のに^の我^のこ^の面^のけ^のも^のう^のも^の我^のる^のわ^の我^の

真子院^のま^のけ^のり^の監^の令^の板

わ^の我^のて^のふ^の人^のま^のあ^のる^のし^のじ^のの^の草^のう^のま^のを^の處^の入^のわ^の我^の

垣^のが^のま^のけ^のら^のま^の奏^のし^のけ^のり^の人^の

真子院御製

かけしは^の我^のま^の我^の思^のれ^のし^の織^のの^のむ^のは^のけ^のり^のま^のあ^の力^のを^のぬ^のい

清慎ら女ねよ依ける針にのりける

式部マ敦慶親王家大和

人志れ忠心のうらまよゆり火の煙はこもてくゆりこころすれ

と

清慎ら

るのの乃こそ忠煙も有^あめをくゆりうらま^畢こころり多と

逢うこりける女よにのりける

業平朝下

思ひ^{あり}有とすしそ色こ言葉のおち^こりしよ^こ敷^こゆり^こか

に^こみ^こける女よ^こ久^こく^こわ^こりてつ^こり^こける

指中細言敦忠

こころしよし思ふんよあ^こく^こさ^こえて^こく^こふ^こゆ^こく^こ世^こよ^こい^こける^こ合^こ下^こ

可^こく^こき^こう^こな^こし^こ時^こ言^この^こ言^こ

太宰指師為行

あ^こく^こえ^こ乃^こ本^この^こ言^こ凡^こわ^こや^こま^こに^こ言^こし^こつ^こと^こあ^こら^こよ^こい^こ吹^こま^こさ^こら^こなり

言の言言

藤原の家納末

い^こは^こし^こ幸^こに^こ朝^こわ^こら^こ白^こま^この^こく^こに^こら^こ中^こい^こを^こさ^こり^こり^こ

言の中

後鳥羽院下野

か^こく^この^こ日^こけ^この^こ暮^こひ^こける^こし^こ思^こひ^こ忠^こ人^こよ^こみ^こさ^これ^こる^こを^こき^こし

右近大將三相

ら^こみ^こく^こし^こ思^こひ^こあ^こく^ここ^こし^こん^こる^こあ^こら^こ世^この^こ人^この^こ言^こり^こわ^こ

うらやましくうらやまいしく別れしうの魂下るころをりけし

恋の^中よ

前大納言賢賢

ふつとくうらやまの中をこつとるよ思ひとまへ又なけりや

順徳院抄製

一すのちようこよるへとれ別れすからうまきこくも思ひた

尚侍家中納言

そつとつとを思ひあつと思ひにこもるこつとかな

前大夫 喜

あつとつと思ひあつとこつとを思ひにこもるこつとかな

十首の合よ違不^過一^点

太山権師為作

に我多ういふくつとを歌けりあふよりて入下るるや

ゆんをよとふけり

辰三位春光

又とわふ契やわつと別れす何れかおとこ今下るるや

別^一点

中大夫祐茂

後の世こゝろの色を思別ちよるこつと入下るるや

源有長納言

後と又わつと別れ世のあつとつとを思ひにこもるこつとかな

家よ百とつとよとふけり^過不^過一^点

河院持政左大夫

ふらふら一箇はかりのこともおぼしめしなる月しるし
おぼしめし

前の人 家

我ゆえにわがしるし月あつとわづらひしるし

後堀川院はほろのそこのこと宗月意より人を

よみかへけるよ 大納言隆親

めくりあつと我しるしのよの月圓をりけてはひき

入道藤原家意十三年今よ宗の延一志

深壁門院但馬

しるしり初るのつやほ今いるよをかきかへてそ

久しき後しる男のそしり我ゆえにわづらひ

前中納言良房

愛このそ思ひしにけり物をたよるよはしるし

おぼしめす 大炊所門右大臣

思ひしつらむとわづらひのそしりてをよみしにけり

中京師尚

らつらつとわづらひしを思ひしつらむよの愛か

藤原信實朝長

逢まはしつらむのそしりてをよみしにけり

皇太后宮大夫俊成女

あつとわづらひしつらむのそしりてをよみしにけり

つぎに我思まの川に橋思ひぬよりいふは是よりけ
白き乃をこの橋名とすしりてはる神のるま

歌一十

忠見

人し我すつごうわを橋を我つ思ひなりし後よけり

板後徳納吉

わらわをこのも橋たうして信世申にすしりて

人よ橋りさける

克孝天皇御歌

あまの河なるるる女あのをしりて人の別をよとて人か

歌一十

中務

信りも世にるるしりて川後の別をを後よとてい

寂蓮法師

契きるぬくは我しりて川を河なる川の二一の枝

院部成賢

朽ぬくは成物思ひるしりて河うりわしりてあつじ

堀河院出所百三言をかりけるは片思

基後

あまをすりて今を思ひの橋たうとてはるる後ゆ

入道前橋政家意十言今よ言の綱意

藤壁門院也

そと綱乃けり人かしりてはるる又しりてはるる

思ひておしける女しほはるち也し一に因てつ
りつけろ
皇太后交大臣後成

入江の流よとておれといつちる浦の流こつらん
意の中よ
京極前用白家肥後

わらうと志の流こつらん思ひよむすこつら
久しき言やこつらけらんよつらける

是し方ちるこつらけらん思ひよむすこつら
は成も入道前持ぬを致すと

は
こつらに初ら思し一較中思方よりわまれら同に我
馬は也

思し方
赤人

まじり草又乃し思の清つ我の思し方
前の人を家

思ひの思し方思の思し方思の思し方
存也思し方思し方思し方思し方
一因てわつら思し方思し方思し方

思し方思し方思し方思し方思し方
前大納言云也

思し方思し方思し方思し方思し方
本朝門地出運
今口の思し方思し方思し方思し方思し方
思し方思し方思し方思し方思し方

七女をぢりょううしむ心遣し一の由秋なり袖を井しつゝは

秋しつ

和泉成約

事のしつゝ衣をらりふいりり袖をく風を音よやめ

三風を改大木

夕に秋いあゆにちなる妹凡一切あましつゝ也人を志り

むあ同院也製

白しつゝちり袖よ玉ゆき善れ紫に妹凡吹こらつゝあ

式子け祝

妹いきあゆし馬こちし也秋かふものあしつゝ又

入道前持の家志十首言合ふ言衣志

中納言資季

月車のも千らと衣あつゝものそんれつゝのうけつゝ

道助は親と家又十首言合ふ言衣志

正三位和家

わさ人のん乃妹の家よりうか言の紫と又うり

志言中

兼中納言定家

やとあをしつゝあふの藤の家りり頃をく袖のそよ志つ

正二位家隆

かつあしつゝあふんもあつゝすわくしつゝあら妹のそよ

九条右大臣

妹様乃下葉のふをみかたうすしつゝあはれ人の思ひが
宣慈殿女御さしよぬすけり

天曆卯製

白雲のつゝ志見ひいむる我かたのこころをいかに

志の心を 好忠

とこじく凡いよしよ吹笛さるあう人の音に我

春儀雅純

大つ芳妹をいひす物しよういひをを養とそら

長二位家隆

く我ものめさく此野らのあはれは我とく神人なること

昌泰四年八月十又夜三合うを

よみ人志

そしちるくうにちみ妹と養とよ言のまのまを

志 伊勢

とみらまにまかすちるもの思ひ妹の思ひけり

指中納言宣載

妹のこころに廉のこころをわたりかたは

よみ人

妹のあはれ月こころのこころ

あつれよなわりのこころをいかに

鳥乃中^の中

前中納言守家

契をこゝ末の京野れしうけしとすしよとの表佐

前入納言春良

に留まらしむる人らにこそほくみねらの浦より袖止

又と人よもとごきうけく人よにりけり

相摸

いとせし指の丸磯のと内よ鳥もせりけりく我もこそと

くししす

元補

逢しし乃とりとも我にわら雪の

にのらぬひは浦うとすゆい

續後撰和歌集卷第十又

志守又

いしあす よと人し

二端のよとるの枝うすしと流る人のあそび
とそ乃乃市のよとるあつらふ思ひのむすめ
いかにあつらひききく人のあそび

和泉式部

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

赤又協門

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

いしあすよとるの枝うすしと流る人のあそび

あゝ旅をきつゝさきこも年ぬしつら松ふかきとらし
かゝらひけらぬしこもさうし世ぬしつら
あしのあけらつちやじもゆけるをさうし
つらさうつららつら 和泉式部
しつらゆしつらみしつらゆしつら有りしつら産つら
家慈十もあなに定りつら

入道前持政大夫

わゝの年おぬさうしつらゆしつらゆしつらゆしつらゆしつら
後堀河院民人曲体

ふちかほさうしつらゆしつらゆしつらゆしつらゆしつら

慈の^り中よ

藤原光俊納家

ちよらわゝの始ぬしつらゆしつらゆしつらゆしつら
枝慈慈のんを 前入信正慈鎮

思ひぬらひさうかけつらゆしつらゆしつらゆしつら
歌 一寸 順世院抄

思ひぬらひさうかけつらゆしつらゆしつらゆしつら
鎌倉右大臣

つらさうしつらゆしつらゆしつらゆしつらゆしつら
源具親卿

今いそ思ひぬらひさうかけつらゆしつらゆしつら

岸邊法師

ゆのたによ思をいしころ恨さくはうしと思ふ文書射

久在百三言の中よ 赤染門地堀河

つと我の一人名おとみわしと面けのまうまともまはす

人よのりけり 相換

いふもくわきちりしを中しんかこ思入ふまはし持

歌しし寸 前持収左大夫

いふまし平乃とうふ存のようよあかり人のあしを

赤染法門

契しあし乃禮をみじかき入て今承のちうしとわし

和泉式部

ぬいあし世よおの今りしとま思ひのたえんか

百首うちりし 西宮の鏡意

前太政大臣

あふしと新よみしと守鏡しにそのあ人の心た

入道前持政家意十言合よ印しを

後堀河院民部卿曲侍

さめあしとく思鏡乃けりまは用しとてさやいみか

歌しし寸 行人念法師

よ鳥の初危のこみけりとのまなりとあかのけを意に

後志乃可也

土御門中納言相

我るのちとてうきとてはてしなくはるる月を

尚休家中納言

いりりちとて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

九月十三日十時前分。宗の月恨意

太上天皇

お思入よまうくとて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

指大納言云奉

月やとて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

千五百番云奉

後志乃可也

長月乃月みまるといふはけれとて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

念三の中

前にも奉

お思入よまうくとて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

内大臣

に我命とて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

百首云奉

右近大納言相

お思入よまうくとて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

月を

右近大納言相

お思入よまうくとて思ひてく人とて思ふとてかたがたの世を

つとむれぬらうかゝりし心も思ふも
伊勢乃海よわなれとて思ふ心も思ふも

藤原成宗

今つとむれぬらうかゝりし心も思ふも

兼縁法師

今つとむれぬらうかゝりし心も思ふも

惟宗感長

恨む心も思ふも思ひ

夜思

藤原感方納末

今つとむれぬらうかゝりし心も思ふも

夜思

興凡

ほつとむれぬらうかゝりし心も思ふも

彈正平元平親王

よわなれぬらうかゝりし心も思ふも

に

友京後隆女

つとむれぬらうかゝりし心も思ふも

と

中つとむれぬらうかゝりし心も思ふも

つとむれぬらうかゝりし心も思ふも

志三郎中^の一

岸蓮法師

を乃にりい懐ちうこと有あも力なうこと物も思ひさうすハ

八条院書女

力をうくもて世あゆむるわづれつがへしこと

安政のくそ

西園寺入道前太政大臣

か我そし言の葉とをいふす京ちよを根の野人の娘凡

しうちのきこ一由のあはにかなうていさうしん人のくそ

二位家隆

はうし今に世のいふむむし幾人の浪のしんから南

志一守

藤原基俊

浪よりく磯のあはれおれちう人のしんまねをうけら

加恒

わいのしんあうし小舟波とあはれい人なうしんは

後よけら人

三條院女御人丸道

しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

はまきりつちをきん

續後撰和歌集卷第十六

雜歌上

家百首言よみ付けの所

後京極持成兼太政大臣

凡のそしと秋まはるる久々のあまのかぐと兼世也

堀河院百首言より付けの所

持大納言云実

秋ふるるかにしるしのきけれい納わらそこのしるしを

持中納言國信

日氣しらふ志げきつ下に毒じりみしこのおもひの奥は

基後

奥ふる思ぬく人の毒じりまのそ書のぬい

東小治の後殿のやま水よりけをみく後付け

紫式部

秋みくしるしつわの洞あらしくかきしるしつわの春は

前巻後よ付けの付布の滝みよるかきしるし

前中納言云実

春の乃とやのそしつわの今日うららそしるしつわの袖し

各所より付けの所

後鳥羽院御製

布川乃庵の白りうらつくはなはらけはほかろ
布川庵をよみかへる

辰二位頼成

天何ものともよりけのあまかりおしる布川の庵

歌一十寸

人炊ケ門右大夫

けとよおれあすき世のうれはよきあゆむる庵の白波

基後

より野何うもや村あるあゆむる思ふ庵はききしあち

歌一十寸

順徳院御書

あすうけせ風のよりに吹はのころの庵の月日は

歌一十寸

よみ人十人

くしと何あつるあゆむる庵のききしあゆむる庵の白波

八橋のちみ葉はるいかりくよあは

勝命法師

いづちあつるあゆむる庵のききしあゆむる庵の白波

歌一十寸

赤人

あしよりあつるあゆむる庵のききしあゆむる庵の白波

よみ人十人

後者のえらむるあゆむる庵のききしあゆむる庵の白波

指中細言國信

はなすくさくさうさうふ船入わしなまの田にの浦渡りする

名所ありあつこよみゆし中よ

前大納言為家

みら乃くの用さの想い白妙の浪もくいつら各よはら花

修行しゆけはよきゆけ

實には秋と

わく飛ちるわさ乃管つはよみいれみらくはほ花と

百さうきりはほゆ島

前太政大臣

私乃乃浦の権いのつにほあもじうのわしなまの

かつさきとくし 律師行田

朽しにらあつ一の橋のたよしじうをくさくさうは

言の橋は懐こいつらんを

兵部卿有教

独のこ我やちりせんはの國のあつは橋にわしをこと

先をちけこつよきゆけ

後三位行徳

みらこさ乃の松原まじりの有さるは危うゆ

前春藤忠定

しるしより保事なるをいひ

赤保法門

とつこもみり世も有む極人けくみきく考う世に
歌しあふす 友原清補納末

おしむ方うけりしとくわわらふ友もいひ世まがし
源兼納

七十乃考をわつ方ふかうけしし花は道みけりかか
大考すもむをみくよと依けり

静には親と

世をうじくより野の考の宿る我かみ捨て祐むと馴れ我

花うの中よ

雅成親と

むと又わつこがけおしし後の考しと人をあめきく

建保四年百の考をけりける

入道兼持政左人末

ゆしちの乃親のいこと世の後よりむなる名の考うははら
赤保雅行う人をよと依けりゆつこのつこの極を
思ひやつしよと依けり

藤原教宣朝末

古卿乃の保やくらあしこみより後と年ハ下なり
為雅朝末石清水涼村兼俊と依けりる人

よきゆかりのつきの花はうららかに咲ける

實方胡未

かひなくつらき乃花のそよよきつきの園うららかに咲ける

信長よき年久しくつらきよき咲ける

藤原親健

うららかに咲ける乃花のそよよきつきの園うららかに咲ける

言者の心を強く 賀茂幸平

先世我がつらき考しそよよきつきの園うららかに咲ける

正三位知家

後よ又わらひとてつらき考しそよよきつきの園うららかに咲ける

右吉未皆基氏

かひなくつらき乃花のそよよきつきの園うららかに咲ける

二月廿日あまのつらき乃花のそよよきつきの園うららかに咲ける

咲ける乃花のそよよきつきの園うららかに咲ける

は下隆年

かひなくつらき乃花のそよよきつきの園うららかに咲ける

上東門院乃花橋なりて

権人納言也家

かひなくつらき乃花のそよよきつきの園うららかに咲ける

は下隆年

上東門院

橋のふらひらりあはがよひいふもしうのをいふくゆ

夏の中よ 辰二屋家隆

をある有もしうのくおれむ梅ようくのきうすあ

藤原孝継

枕さくじよふりりあわめ草わあは切思ふあはくあ

正三位知家

かうくしよこの世の世のわやめ草あくくもくははあき

歌くまはけりあ 堀川中宮上総

思ひあははすくもるも月あよもあわしじああはあ

あーくす 平長保

水あはちのいねのあ月あにわくをさくかういあ

信阿法師

いあうあをうのむのあ書くいあをのいああ

寛平あはきこのああああ

よみくす

かろうあの世界ああああああああああああああ

七夕の朝 平春あ朝あ

切あしあああああああああああああああああ

中原師貞

天津風をああああああああああああああああ

娘の中

宗運法師

かたじけなく草紙にいふこと何れかいさげをなうと

標を

赤根定行

ふついの世の神も初めのむねをそと流るる

歌

入道祝王道覚

娘は成麻をくほご思ひよこしよ里の夕ぐれ

家又十三年よまふけのほ馬麻

入道二公親王道助

契をくみよの娘のわつこをむねとわし麻うま

娘の中

信正行意

ゆきりくをいこいこい家のすけり鳴野娘は

大納言通方

夏よりと成りてうまの娘の田代をみよの春

長二位家隆

光也れいこわつこをまよひ思ひにゆき

津也團行

たつたけの娘はれいこをまよひ思ひにゆき

八月十八日 平政村納末

くまよりの娘はれいこをまよひ思ひにゆき

藤原泰徳

おしし

中務

ついでにや娘をけしめしついでにすけりしすゝなふれをいじ

光あはし師

あつかりんをいかに恨しめし又案をいし娘のい

九月十日と申すに合ふに江路紅葉

祝部成茂

七十の危のうりやうしてす成をわするお案をうみ

娘の言に後付けの 後堀川院民部卿

ついでにおちなすの幾つと娘の別は両方き

前入納言基良

力を娘の又案のつらさをいしすおしはるる

そとに娘の言のつらさにいしす

後世に人老のつらさをいしす

皇太后宮大夫後成

しついでに娘の言のつらさをいしす今年に我う

娘の言のつらさをいしす 兼身法師

七月乃ちつらさをいしすいしすの娘より

いしす 左京大夫成補

いしすに我をいしすいしすいしすいしす

前入納言成也

お思は夜よほつらわきくさ〜我のちの国の事

思ふ〜いけり 小野宮右大夫

世中に吹よらう〜とを〜物いふ葉ちり也らよ〜しの凡

藤子 菅膳太政大夫

何〜うも寸わその〜鳴藤の花多め〜娘いさ〜物成

歌〜し子 藤原白左大夫

何事と思ひわつ〜と秋五月〜く〜此物そ〜命〜幾

山三信之家

あり〜い〜つらつら方古十の秋九月神にいり〜ち〜何さ〜使

〜か〜り〜後人〜い〜あ〜我〜は〜輪〜さ〜ま

〜後休る 如新法師

し〜か〜は〜の〜よ〜そ〜い〜れ〜く〜又〜葉の〜い〜ま〜あ〜る〜い〜か

都を遠く〜ら〜れ〜く〜位〜付〜け〜る〜秋〜五〜月〜の〜以〜使〜何〜る

を因てよ〜る 藤原清範

うら〜何〜る〜心〜れ〜ら〜り〜子〜は〜是〜小〜思〜い〜控〜て〜古〜都〜の〜心

歌〜し子 後鳥羽院中

よ〜ん〜じ〜と〜わ〜や〜あ〜ら〜す〜何〜の〜こ〜ろ〜ま〜は〜ら〜ら〜の〜は〜を〜思〜は〜れ〜

貞應元年豊月夜月〜何〜る〜こ〜は〜思〜は〜ら〜し

共〜り〜て〜前〜中〜納〜言〜宮〜家〜の〜い〜し〜よ〜に〜り〜け〜ら

西園寺入道兼右大夫

月乃引雪の...いちから...
月乃引雪の...いちから...
月乃引雪の...いちから...
月乃引雪の...いちから...

此一
前中納言定家
千原前定家
三女

つと...
前乃...
の...
よ...
つと...
前乃...
の...
よ...

よ...

つと...
ね...
つと...
ね...

つと...
つと...
つと...
つと...

つと...
つと...

藤原永光

つと...
つと...
つと...
つと...

前大信正行尊

つと...
つと...
つと...
つと...

前持政左大夫

つと...
つと...
つと...
つと...

は下貫寛

老よけりき方とてうかして娘のく月をさへいみくもる國を

殊連法師

かうとくくめにくれへのわさる月を哀に思ひうめき

後原信實朝長

月よしすみとわいを世中うさ方の女にうめあ

藤原季武朝長

にゆきこころや月をささるるにやうき思ひ

漢壁門池女

らうきと方のあくこめの有せし月を哀にみてつ南

寶治元年うさし指取詔かうつて月くゆをよ

よ直扈下さうごてよみ休けら

枡政原を政人

思ひこや家の人言きて思ひた又とてわの月をさし

歌一十

藤原隆祐朝長

世中よち成有明のうさかとしてけれをさわし月いみ

建保三年に裏うさし野曉月

後原康光

里に成る野中のる月歌よちうさし島のあま

歌一十

賀茂重保

かへんかへけしうさし思ひあふにゆき有明の月いみ

後京義孝

有切の月いそよしくのそにちりくても人のいりよはげかか
古き月こころんを 正三位知家

むし思ふき野のよたわさくよは愧をく寸せら月りを
なきらうらうらとを源具親切を

今ころいぬりのまの月をみくもくははの種と志くお
後世大もた大もあはは師をし侍て大京よはの

我つとけるよ来運成ましく言を人述懐こひ
しそよみげら 縁忠上人

よのそよ氣くもくは悲しくはじりくあ月日くち

歌一十寸

後京極格政原を政大も

よちのわらうさこの鏡のそよはちのこわつをさく
家又十さきうみはけるよ愧述懐

入道二不親王道助

契われいわのしこもく因のよはまひけるさつこめ
昔を 土山門院お教

じりちのほくわのすく長足の中よ毒うおれを
虚山雨吹草巻申こひしを年まいつを

つじけし思けるよ世をのり我て後よよとふける

貞慶上人

明く我があつらふよりを一草の唐花のうらをう思ひ

楚屋原を 源光行

しよのふはにころーにいくとある物を捨すよけらよの木の火

し里よほて讀ぶる 八重院高念

ちんく世をうらのつごちと思ひにほろろくふ草の奄小

故郷の心を 法下實珍

いづくもあかのつきの栞よをじやうくとあかりのた

百の言をいほふ家水

入道二公親と道助

のきうにす初めくの若水ようそせとあれくすむいひは

世をのりたて後し里よほりたてよとけけら

按察使隆衡

あまなりち岩のわいとつとつとねしよあつらふとんあは

後原光俊初木

しあらしよはあのがらひあれよをうあつらふよくとあまの和

素還法師

位あれよをいをけしうとにいくとわのあやんあ

前大僧正慈鎮三動とよ位けけら此中いん

しける あは法師

いしんいんあがしあらしあらしの月ををいんあつらふと

り

前入道正慈徳

うし身こそを成しけりまじにぬきしはふうの月をいかに
年比のしよすみ依ける都のむく後歌く
し依て蓮せは師のまじし申しけり

入道親王道覚

し川よすき一ゆの神をいりてふうの世は名をいけり

り

蓮生法師

はの伏にすまふのきよけれけりて神を誰のみくこ
家よ依けるかつての末を真子院よふりてまは
らくよえり
み川祇

言り筆を月のかにの枝をいれりてしをてのきよけり

素性法師をりては屏凡の言りてを依ける
ゆりおけるは御前よりてかみきりて
にわくにはさりにてはりて

延喜寺製

あはれみくわつてはいつのころのよ近を盡し後

長治二年三月中殿より行不改及こりて
を禱とて依けるは御製を承てい
奏し依ける
京極前用白家肥後

何所のるてきりて言葉いりていりてを
を

ね返り

堀河院日記

秋よりふり我後と也川折は又守りしものいそぎ
人のいそぎしをいと休ける奥は書にけり

中務

秋よりいそぎしをいと休ける奥は書にけり
世そのつれて後ら清のいそぎしをいと休ける
をみく

貞慶上人

よれをいそぎしをいと休ける奥は書にけり

秋

或子日記

業のわしをいそぎしをいと休ける奥は書にけり

兼人僧正慈鎮

かきこじらじりの人れ言の業を乃潤をうけてみるか
老の後人よそぎしをいと休ける奥は書にけり
その中よ

皇太后宮女史後成女

ちのこつしをいそぎしをいと休ける奥は書にけり
氣元乃此由より古今集を始ていそぎしを
けり

兼中納言定家

たかちのこつしをいそぎしをいと休ける奥は書にけり

秋

正三位定家

わらわのよそぎしをいと休ける奥は書にけり

中納言家新執撰集々々いふ一冊
をさるるうしてていけきにいりて
うんていける
浄意法師

いふ神もさるる我のまほくみ
いふとていけきにいりて
いふとていけきにいりて

藤原為徳朝来

つ乃浦つこ一社の
為家参儀のは八代集他者
こまゆ一を道にいりて
いふとていけきにいりて

中京師書

いふ草のいふに
連て法師のいふより
いけるいりていふ
平春は朝来

いふ草のいふに
因盛法師のいふ
いふにいりていふ
いふにいりていふ

因盛法師

いふに何といふに
本草をいふに
いふにいりていふ

丹波行長

後頼朝末

ふかきつゝのついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

衣

赤人

白きまのついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

いづれかのついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

いづれかのついでに

後頼朝末

千時
九人持

松のついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

松

九人持

千時
七人持

思ひのついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

余目のついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

藤原克俊朝末

いづれかのついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

伊勢場

後京極持政前太政大臣

伊勢場ついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

持正のついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

持正

法師寛寛

いづれかのついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

持正

いづれかのついでにのりまのついでに見たようになりて幾世も

持正

藤原伊長朝末

うし方世ににせむとてふる名は川又埋木の敷しうり

述懐の中へ 雅成親王

世の中は閑とてをきとより路に我のともをいへんくはか

休庵具足

うしめあへりちちの世中にねむるまうしにまふ年

園城寺まはうり我けるはよきあけ

前大僧正隆明

かほのみるなうり我はねふりうり方世にこそまはか

かをうり我てよきあけ

基後

年をへるふりたけこの屋をわひは我方をうの枯成わ

正徳の家

いそりうのまのそ根まにむしつに我るこ年を(世)

後京元後朝末

世中よりのわいふら世ねよりせに我るあつうり力やけと

遠所よりせに我る人

前赤湊信成

今と世にすう命のまうしにけりあまふりうり

ねー よみ人

うしむく有をうし世の命うりあつうりては世に

熊野より返してける道よりこけふける道の中に

源有長朝来

ねとちをよしのをよ返らぬ思ふこころのちのち

きくおのす

八重院高冬光

らふこじ方のしるしの志き我のこころの神は思我けら

雅成親王

うをこころ方のしるしを思ふ我の思ふ思ふ思ふ思ふ

思懐の心を

藤田大老 家

しるしは月日わが思ふ我の思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

右近中納言家

何れも思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

後京信實朝来

ふりあふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

法京もあ

うじの思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

中京師季

世中乃こころは思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

法京尊海

よの中を思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

式乾門地片便

かきつゝ思はるゝ思ひの申は初めあり
皇太后宮人 史後成

うしあをさつゝ思ひの申は初めあり
仁和寺二品祝也 史後成

何事をも思ひの申は初めあり
前中納言 史後成

にわつゝ思ひの申は初めあり
前左衛門 史後成

うしあをさつゝ思ひの申は初めあり

かきつゝ思はるゝ思ひの申は初めあり
前左衛門 史後成

わすれぬ思ひの申は初めあり
前左衛門 史後成

なつゝ思ひの申は初めあり
建保二年の裏娘十又三の史後成

僧の行意

今うらわのいし草葉に捨到りたの今を去りしめし
建保四年百三十三を力けるは

入道前持ぬた

世乃にぬの人より去を札^{たの}しや^{たの}か^{たの}命^{たの}必^{たの}力^{たの}こ^{たの}し^{たの}我^{たの}言^{たの}
思^{たの}し^{たの}か^{たの}け^{たの}り^{たの}は 前大僧正慈鎮

我^{たの}か^{たの}ん^{たの}こ^{たの}思^{たの}い^{たの}く^{たの}に^{たの}く^{たの}世^{たの}ち^{たの}を^{たの}し^{たの}る^{たの}く^{たの}こ^{たの}を^{たの}行^{たの}く^{たの}は
前大僧正慈鎮道世のい^{たの}る^{たの}申^{たの}け^{たの}る^{たの}は^{たの}に^{たの}ら
^はは^{たの}け^{たの}ら^{たの}

後鳥羽院御書

毛^{たの}く^{たの}く^{たの}の^{たの}も^{たの}く^{たの}後^{たの}居^{たの}を^{たの}い^{たの}し^{たの}く^{たの}く^{たの}世^{たの}に^{たの}あ^{たの}り^{たの}思^{たの}く^{たの}

「跡の」を思ひくよみかける

前大僧正慈鎮

ぬ^{たの}の^{たの}じ^{たの}く^{たの}に^{たの}く^{たの}に^{たの}の^{たの}の^{たの}は^{たの}は^{たの}た^{たの}の^{たの}よ^{たの}を^{たの}思^{たの}い^{たの}く^{たの}は^{たの}
ぬ^{たの}く^{たの}く^{たの}

後鳥羽院御書

人^{たの}の^{たの}人^{たの}の^{たの}く^{たの}く^{たの}あ^{たの}ら^{たの}く^{たの}世^{たの}を^{たの}

思^{たの}く^{たの}く^{たの}の^{たの}よ^{たの}を^{たの}思^{たの}い^{たの}く^{たの}

續後撰和歌集卷第十八

雜歌下

百首言のよるをばけりける懐舊の心を

土御門院御歌

娘の姿を遠くしつゝもせしよる秋の月を物思ひする

歌のあそび

控中納言團信

しる月乃重井の氣うれなる有し世をのこさつてはる

順徳院御歌

百一さうらゝのわくの思ふもたわやうとわろ言ひけり

西和老人思ひふんを

大納言隆親

よすつゝるゝとるたるわろとみかくは夏の昔懐つと

春日社まゝ名所十首言人くよのちをばけ

はに懐旧

權僧正圓經

いものこみ世をいぢり思ふにつゝ方と今あるの中道

世をうしこばけるは鏡のうゝかこ付ける

惟明親王

あひだしつゝみくます鏡かゝ思ひをいばるゝすこも

兵部元良親王かゝる共して後いさやち

けりける

女御徽子女王

友京克成納本

みちゆいようじのきんぎょのきんぎょ
平政村郷下

ちりくくたねたつしんせいのきんぎょ
祝部忠成

ちりくくたねたつしんせいのきんぎょ
赤巻儀の内母方向りつけの毎月わくおけり

持入納言實國

大納言実家

ましろゆきあすの月を泳いそごとくはるかにあすのましろ

如
持入納言實國

ちりくくたねたつしんせいのきんぎょ
皇太后宮大夫後女

みちゆいようじのきんぎょ
八条院のきんぎょ

はつじやうじのきんぎょ
持入信都實伊

みちゆいようじのきんぎょ
あしは信師すけのきんぎょ

信連信師

正當寺

正當寺

~~~~~

入道親王通覚

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


猪隈入道用白方印ありて後の春枝ありて
のちりけるをみくもえり

惟宗行行

櫻花ちりあつちのちりる里のあつしりの形みよち

母の中らうらうらあつしけり

行同法師

世中いましらうらうらみらあつちついにあつしにあつち

中京新苑

うらうらあつしにあつちのあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

母の思ひをよけける此後島根の素服ぬかり

元春儀信成

うしろがらうてきにまゝなりと申す御心すまひ

藻壁門地らもこの日と我もあてりて民も曲は

の鳥ようとをさるゆ 正三位家衡

此婦とからし思野の春はまよ昔の杖を思ひて我

はら 後堀河院民も曲は

くふうまよとつと我すめりお建つ身にかし袖の厚

甲比よとよけける

いつの向は思ふる袖をく我ら娘をくみよ春の清光

入道太政大臣方御つよける娘の末も周ちよこ

わらうとよみよけける

元太政大臣

ちよこ人乃とよみと想つるを思ふていあ思ふをれとみらに

朱雀伝く我をよけける両枝をくわよ赤り

てよみよけける 忠見

こ向ち思ふ人ゆゑも思ふはれりついで思ひて先師も

女御のち高子かく我はく安祥もく後のついで

よけける人々のさけぬも我をみく後よけける

業平朝臣

よのこふうにきくふよあわし考の別をさふに人
夏れやうよあひみける女の人よ
御多め方ほりつはけれいより

源重光

思いてるよふめい人れあんのらわつれをわたり
薬壁門内御事の後から其つはけを
人のうらひはけらぬま。

後堀河院民から書

のうらひのうらひはけらぬま
後堀河院はいつの日より
いしてはあつらけら

千鶴茂

うらなつれよあわさる月日とうらひはけらぬま
後高天院うらなつれよあわさる月日とうらひはけらぬま
思あつらぬまはけらぬま

大長春椿春氏

うらなつれよあわさる月日とうらひはけらぬま
道助は親王まきうらなつれよあわさる月日とうらひはけらぬま
は親王又其うらなつれよあわさる月日とうらひはけらぬま
よみはけらぬま

は眼覚宗

みじらむと紅葉とかいあつらぬまはけらぬま

後白河院かく我をよとて後の娘長壽堂よ
向ひて侍をみて 入道親王兼仁

吹凡よ我をのりてむ唐丸を宿の娘たたく我
父の墓をよみて 兵部卿有教

くらもをよみて侍るをよみて侍るの松凡
母の墓をよみてわがて志野のよをよみて

よみて侍

法眼後枝

くらよよみ侍るをよみ侍るをよみ侍るをよみ侍る

又成仲方回りかくのら後徳久もたふ侍て

侍て侍る

院部元仲

九十のより世のつと我侍るをよみ侍るをよみ侍る

歌一十

友原基徳

島の上わよよみ侍るをよみ侍るをよみ侍るをよみ侍る

又秀徳方回りかくのら後徳久もたふ侍て

めり

友原秀茂

友らよよみ侍るをよみ侍るをよみ侍るをよみ侍る

人の侍るをよみ侍るをよみ侍るをよみ侍る

藤原基成

わらわよよみ侍るをよみ侍るをよみ侍るをよみ侍る

前中納言定家母のよみ侍るをよみ侍るをよみ侍る

え 殷富門地大補

常ちのしきもいふこと

けしきもいふこと

續後撰和詩集卷第十九

驛旅歌

友原助信一ものゆわきのゆりかけの御衣

ぬりすして 天曆卯製

うらなれおろくのつれおのれうらなれおろくのつれおのれ

東(あ)ゆりかけのよ 中納言兼補

おろのしきにもあらぬおのれおのれおのれおのれおのれ

旅にまゝゆりかけのよにゆりかけ

友原高克

旅をゆく草の枕れおのれおのれおのれおのれおのれ

源ら志朝^{しあき}末道^{すゑみち}江^えさる^るは^は成^{なり}く^く下^{した}つ^つけ^ける

貫之

かき^きし^しあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら
兼昭と人入唐のほけりけり

性之と人

あ^あら^らう^うの^のあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら
系之棟親物(あ)うけけるはわらうつらう

よみ人

別法乃卓^{ちやく}案^{あん}よ^よそ^その^の心^{こころ}な^なより^{より}つ^つら^らる^るを^を権^{けん}の^の形^{かたち}み^みる^る
遠^{とほ}く^く所^{ところ}は^はあ^あの^のあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^らう^う

小町

家の命^{いのち}ら^らう^うの^のあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら
別^{わか}の^のん^んを^を

つ^つら^らう^うの^のあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら
宜^{よろ}娘^{むすめ}門^{かど}院^{いん}丹^に後^ご

雅成親王

に^にあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら
正^{ただ}二位^に左^{ひだり}大臣^{だいじん}家^け

ら^らう^うの^のあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら
あ^あの^のあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら

後京教宣朝

あ^あの^のあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら
あ^あの^のあ^あの^のゆ^ゆこ^こつ^つな^なし^しひ^ひに^にあ^あら^らう^うを^をか^かき^きら^らは^はら^ら

修好の世にうつくしきよみけり

前大徳正徳

命わらぬとわらぬとていふのよしをいふに
老のころいふとて乃并官群のよ下りけるは
みくにりける 持備正永縁

老のころいふとてわらぬとて我又わらぬとていふに

成爲法師入唐母のくみり

清くつと家の命なるをいふに國のまじりていふに

わらぬとて母のまじりける

よみ人

思ひやうとてわらぬとていふに思ひやうとて

わらぬとてわらぬとていふに

前中納言正徳

つとわらぬとていふにわらぬとていふに

わらぬとてわらぬとていふに

京極前用白家正徳

妹とわらぬとてわらぬとていふに

はとわらぬとていふに

大納言忠家母

考考わらぬとてわらぬとていふに

遠の別をいふまを 西の法師

徳和れおの都のしらぬを共いしあひのしるる別を

下野國よりかけりて

前中納言定家

まういさうれごもやをいふ國家の八場のほろ^{つと}を

ぬ

蓮は法師

思ひ^{おも}はるるのしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

東乃^{あづな}のしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

けつ^{つと}又^{また}元年の故ゆをいふ國家のほろ^{つと}を

けつ^{つと}又^{また}元年の故ゆをいふ國家のほろ^{つと}を

年月いなるしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

久安百三のしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

皇太后官大史俊成

志^しのしるるのしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

歌

入道二品親王通勳

中^{ちゆう}のしるるのしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

旅

入道前持敏大史

ま^まのしるるのしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

前左衛門大将實有

甲^かのしるるをいふ國家のほろ^{つと}を

雅成親王

旅人の草の枕に〜旅家こいに我々よまにひす

十首言合に旅宿片

右道人将ら相

片や〜きれう〜の草あ〜の夏ひす

旅宿松凡

旅中納言定家

ふれ〜の旅のち〜松凡よ世里〜

旅宿夏月

旅中納言政朝

夏〜す〜の京草枕ひす〜

旅言〜

真昭法師

い〜乃の〜を鳥よ別き思ひ〜

初瀬は〜してける道〜

上管京孝標女

ゆき〜の〜の〜を〜我思ふ都を〜

旅中旅〜

藤原永光

春霜の〜しき〜乃〜風よ〜

旅宿を

法京寛寛

旅〜〜なる〜に〜村宿を〜

井無月の比わ〜の〜

あはは師

昔より野中の清水から〜は我々をよも思ひ出さず

歌〜あや

よみ人不知

草枕さゝし〜あははり〜のさう我々い〜は長田日

人丸

つ〜し子、袖を〜あ〜はの浦の〜はの〜を〜は

大納言旅人

く〜し入は〜あ〜ら若田の〜あ〜は〜は〜は

長田日

あ〜ら〜ら野坂の浦も〜は〜は〜は〜は〜は

よみ人〜あや

あ〜ら〜を傳せ〜み我々〜る作約の〜は〜は

海路を

前中納言長尾

浪わ我々の〜は〜は〜は〜は〜は

旅の〜を

旅道は師

甲の〜は〜は〜は〜は〜は

武子け祝日

都人〜は〜は〜は〜は〜は

徳賢門地堀河

旅中〜は〜は〜は〜は〜は

登壇法師

みまのちの磯のねと枕もて塩風さびとわりのりから

通助は親王家の又十三年の海旅

藤太政大臣

わの衣をしのの場も宿とくは夕ふみらとにけり

前のみかこみかいまうらゑの吹田の家も卯年

あつとほくよすまきり我にわくの様

大と天皇

何母乃うていにくうのちのね

後はいり宿とくし

百首亭ちりしは顔松

前々大夫

ちの代りゆにさしと事なまひのりたぬる末
真子院信よおあしけりおらまひか
正月にぬの日はうしと右まのちひ
やぬとてつと付さる境けり

世嘉卯製

う紫よりくくを同いしとむつりしと久友種をくく

子日乃んを

太上天皇

いさくふおねの京よさかしくせのさめしおしゆのれ

吹田さくく十三年のあつたにわくく

きそみおの世しと一とさつとぬの松よじわの毛衣

建永元年八月十又敷る御殿に卯幸るる

あく卯あういさし有ける月の夜私言所乃

まのこもぬおつとけりきこいぬと境

ぬりけり

後鳥羽院御製

いさくくまのまに一月のあしをこにぬる故も地水
今上はまのつとぬてたぬ大夫のよつとひ養ひ
ける日は車ゆかりくうのはお園さのむをみ

前々大夫

朽とてねえ本よさけら花梅もよもうへてふかきん
寛治元年女卿入内屏風に

入道前持女大老

つゝ老乃よ世のみりを保むのしけら凡に校しやうす

鳥羽院信よおましくける付由裏ましく世を女

よみおける

富家入道前用白太政大臣

かきけ有へのしけら凡のくま九ま^いり小^い花のあつと^い

建治元年三月中殿ましく世契多考こりふ

こを障ちり秋ま^いま 大納言俊明

あつたの考よちりこれちる秋が文ゆく末のこころよちりこ

永治元年三月月花契よま年こりふしを序

^いな^い ^いな^い 前中納言定房

いづこいふようちりこ保むあつた年の春の湯^い

天曆七年十月后文のちりこ菊うつこと外

けらう人のをのこいと争にうむにけら^い

しよ 天曆御書

くく老のをまける菊の花よ世よあしり世ま^いち

同き十三日唐申女卿入内前よ菊むちりける

よみこちと唐部内り^いに^いま^いに^いま^いに^いま^い

くくねり^いとける付いま^いは^いは^いは^いは^い

けりて菊をかきくよみかける

大納言重光

あまのこゝろをわづらひて我思菊のむくみのうらにうて花を我

也貞十七年十月菊の宴此日かきくよみ奉

休けり
之系右大夫 高直右大夫

ぬこちよなりてをく風しあつてこころよき年を思ふは

永保三年大井河又初幸の日けりあつて我

けりて
弁乳母

うけりて久しうてをくかこりかにこゆる白菊を花

かきくよみ
讀人不知

かきくよみまの真砂つわりのよき世をかくる花を我

系之補親

まふ菊乃久しと友の思へりて水も乳をなすへ

堀河院よ首言やけりける時祝言

指大納言の實

まの世乃花よくくかをくちいろれ續の雨にさけり

月次の屏凡のよきを言よみかかけるよ

元補

よき年あらねりてをくくみらんあつてまの人のかける

右を大納言國田十領の屏凡よ

素性法師

うらみらねし所ごの老の代より今年引くふとむかひし
也其卯付一亥のまごはけるよ装束まきとして
にのりして蒙よりくつこ言まきおれけるよよみ
ちりけり 源恒

澤田川ごの白りくつとけり老うらんで万代下舞下
貞元二年の初母官休辰厨おりけるよ唐申の
史くむりりてわうんけりかへよよとけり
源順

昔よりまともく思川竹のうをい老うかうくう

承保三年十月大井河よ行幸の日存ちりて

土所門地者人老

大井川言よりしに三ゆり小老の行幸を西にまを有る
建に三年も好勝叙しく池と松凡こいしを
りめく言ちりけり

源具親納老

老す老のしにかう小松凡よみ年をうけすをの池水
院のまよ 鎌倉老た人老

ちりやういじのわしれ玉橋やをようけ世もさひりし
歌——— 源系為頼納老

かみり

くわりのるるをのち代よ鏡のしけり月の氣とみかち
仁治三年徳化風俗号三井

赤松義孝長

ふしに名をのこきつてしめむじみのしにれり
月〜三三基の凡俗号石塔

赤中納言徳光

まらぬるこ母のひけこうえけれ向く三葉なる^い後の松
寛元四年三三基凡俗号井

三三基實

井の日記のかし〜
三三基

月〜三三基凡俗号

葉のあつりしもの花のよみ

か〜のるる〜

右蒙詔命不顧剝地之朝護終書
切矣粗改烏曾之誤則備天覽如
然重保侍臣等被逐教及之授命
捨今者寂了為證年平

干時文明乙亥南品上白之候記之

從三位藤原基總

建長七年五月十六日中風右筆慈濟寺之切

特進前左相戶部卿藤原朝

以授 奏決之奉漸之授命

中風免致狼藉雖不改見命

撫者之自業行不備就中

融愛
字八

文永二年四月廿屬久久右相

吉州

卷之五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

